JCCI SINGAPORE

SJ 50

月報

2016年
6月号

シンガポール日本商工会議所

MCI（P）NO.027/03/2016
Japanese Chamber of Commerce & Industry,Singapore
Website: http://www.jcci.org.sg

ジャパングリーンメディカルグループ
シンガポール・ロンドン・上海・倉敷

毎日笑顔の
海外生活をサポート

海外生活をサポートする総合医療センター
ジャパン グリーン クリニック

外来診察

予防接種

健康診断・医療検査

理学療法

医療相談

ジャパングリーンクリニック
総合診療の
オーチャード本院

診療科目
外来診察（小児科・内科・外科・耳鼻咽喉科・婦人科*・他一般），予防接種*，乳幼児健診*
医療検査*，健康診断*，理学療法*（疼痛治療・リハビリ等），各種医療相談（アレルギー*・禁煙*・他）

受付時間 月～金 9:00～12:00, 14:00～17:30
土 9:00～12:00
（日・祝 休診）

予　約 一般診察は予約不要です。
＊印は要予約。

所 在 地 290 Orchard Road
#10-01 Paragon
Singapore 238859

電　話 6734-8871

ファックス 6733-1213

Eメール
reception@japan-green.com.sg

- ◆ MRTオーチャード駅より徒歩15分
- ◆ エレベーターはTower 1、Lobby Eをご利用ください
- ◆ 主要各科医師が在籍し検査機器も揃えた総合クリニックです

パラゴン

健康診断ロビー

ジャパングリーンクリニック シティ分院
オフィス街の
身近なクリニック

診療科目
外来診察（一般内科・眼科*・婦人科*），
予防接種，健康診断*，
理学療法*（疼痛治療・リハビリ等），
各種医療相談（アレルギー・禁煙・他）
＊設定日時はお問い合わせください。

受付時間 月～金 9:00～12:30, 14:30～17:30
（土・日・祝 休診）

予　約 ご予約をお願い致します。

所 在 地 1 Raffles Place #19-02
One Raffles Place
(Tower 1)
Singapore 048616

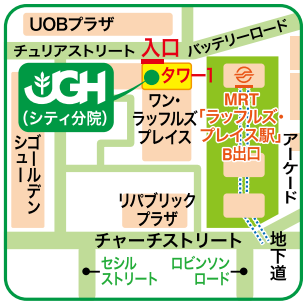
電　話 6532-1788

ファックス 6532-7673

Eメール
citybranch@japan-green.com.sg

- ◆ MRTラッフルズ・プレイス駅B出口至近
- ◆ オフィスタワー入口はChulia Street側（UOBプラザ前）です
- ◆ お越しの際はIDカード（EP等）をご持参ください
- ◆ 待ち時間を最小限にする予約制を採用

ワン・ラッフルズ・プレイス



歯科はJGHデンタルクリニック（本院内） Tel: 6235 7747

www.japan-green.com.sg

2016 JUN

月報

CONTENTS

＜特集＞

■ シンガポールのメイド事情 p02
THE HUFFINGTON POST JAPAN
石澤　由梨子

■ メガFTA時代に於けるサプライチェーンと関税管理の在り方 p07
EY SOLUTIONS LLP
上田　憲治
EY ADVISORY PTE. LTD.
深田　アレン

■ ワインセレブへのステップ p14
LA TERRE RESTAURANT PTE LTD
川合　大介

■ 華僑と創る海外進出の第一歩 ジャパンストリートプロジェクト p19
J CHEER INTERNATIONAL SDN BHD
青峰　隆

＜業界プラス1「観光」＞

■ 日本とシンガポールの観光客動向について p22
JTB PTE LTD
作田　修

＜事務局便り＞

2015年寄付先団体・奨学生紹介 p25
日本シンガポール協会便り p33
議事録 p34
5月イベント写真 p37
事務局便り p38
編集後記 p39

月報題字：麗扇会　青木麗峰
表紙写真：松井　達也　KDDI Singapore Pte Ltd
写真タイトル：Infinity Pool

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way # 12-04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221-0541 Fax: 6225-6197 Website: http//www.jcci.org.sg

シンガポールのメイド事情

The Huffington Post Japan
News Editor
石澤　由梨子

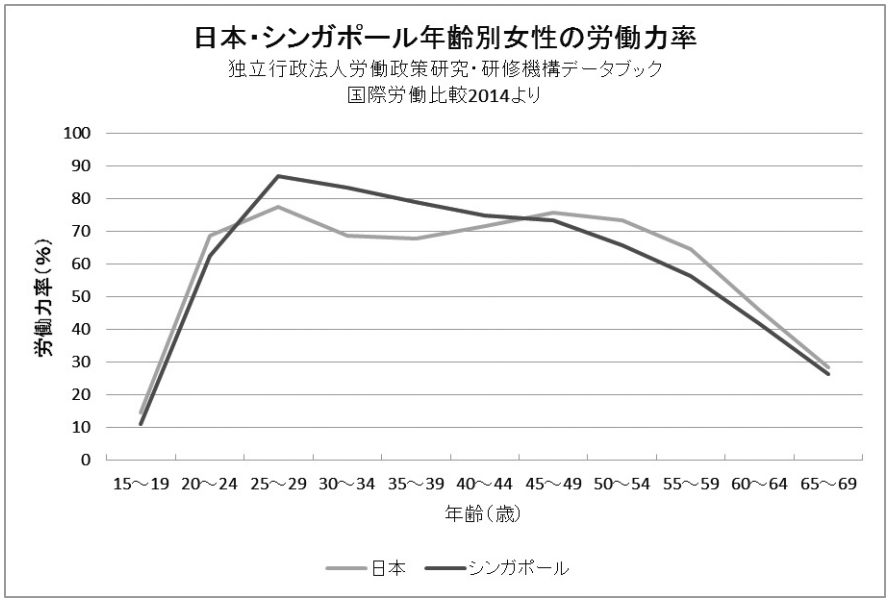
1）はじめに

シンガポールへ新しく赴任された方々の多くが初めて見て驚いた光景の一つが、休日のラッキープラザに集まる大勢の（主に）フィリピン人女性たちの元気すぎるおしゃべりの声ではないでしょうか。シンガポールが受け入れている外国人労働者の中でも約16%を占めるのが、Work Permitビザを取得して、雇用主の家に住み込んで家事や育児、介護の仕事を手伝うメイドの女性たちです。統計では実に約5世帯に1世帯が外国人メイドを雇っている計算になります。中間所得層でもメイドを雇うことは珍しくなく、高所得層では2人以上雇っている家庭も。本稿では、そんなシンガポール社会のメイド事情の一端を皆さまにお伝えし、同時に雇用を考えておられる方の役に立つ情報もお伝えできればと思います。

2）大勢のメイドを呼び込んだ国策とは

そもそも、外国人メイドを今のようにたくさん呼び込むようになったのは何故でしょうか。政府は、経済発展を支えるため、シンガポールの女性の労働人口を増やすことを目的に、1978年に「外国人メイド計画」を立ち上げ、働く女性の代わりに家事や育児を担う移民を拡大しました。1978年当時、約5000人だったメイドの数は2007年12月に18万3200人、2013年12月には21万4500人と増え続け、2015年12月時点では23万1500人となっています。ここ5年間でみると、年3300人~9000人ペースでメイドの人口が増加しています。

その甲斐あって、ILOのデータによると、15~64歳のシンガポール女性の労働力率は1998年の56.3%から2014年には75.2%に上昇しています。なお、男



性の労働力率も1998年が82.7%、2014年が93.2%と同様に上昇していますが、男女差は約18ポイント縮まりました。ちなみに、統計局のデータによる日本の女性の労働力率（15～64歳）は、1998年が59.8%、2014年は63.6%。16年前は日本より低かったシンガポール女性の労働力率ですが、現在は逆転されてしましました。

また、日本の女性で特徴的なのが、子育て期の30代前半に労働力率が下がる、いわゆる「M字カーブ」ですが、図のようにシンガポールではそのようなグラフにはなっておらず、子育て期の落ち込みが少ないことがわかります。こうした政策で働く女性の数を増やしたことも、シンガポールの経済発展の一つの要因といえるでしょう。

さらに、人口の少ないシンガポールでは、高齢化の進展が日本以上のスピードで訪れると予想され、介護をする人材の確保が急務となっています。2011年のシンガポール首相府（PMO）の調査によると、働いていない高齢者世帯の約12%（6000世帯）が1人以上のメイドを雇用しています。2000年時点では約6%（1500世帯）から、雇用率が倍増しています。シンガポールの2030年の高齢化率は24%、独居高齢者は9万2000人と推計されています。この世帯に対応するために、PMOは2030年には30万人の外国人メイドが必要になるとの予測を発表しています。不動産価格が高いことからも日本のように老人ホームを国内に多数建設することは難しく、介護を支える人材としてのメイドには今後も期待が高まっています。こうした需要にこたえて、介護技術を備えたメイドを専門に派遣するエージェントも登場しています。

3）メイドの働く環境とは

では一体、どんな人々がメイドとして働きに来ているのでしょうか。ほとんどが周辺国の山岳・農村地帯からやってくる女性たちです。故郷の生活レベルは様々で、貧しくて学校に通えなかったという人から、大学を卒業して来星した人までいますが、やはり地元で就職するよりも高い給与を得るために出稼ぎに来ています。

政府は出身国別の割合を明らかにはしていないため、正確な数はわからないのですが、各国大使館からの情報をもとにメイド支援NGOのFASTがまとめた情報によると、最も多くの約12万5000人がインドネシア、続くフィリピンが約7万人、ミャンマーが約3万5000人で他にインド、スリランカ、カンボジアなどの出身者が少数ながらいます。10年ほど前には過半数を占めていたのがフィリピン出身者ですが、現在はインドネシア勢が最も多く、ミャンマーが猛烈な勢いで追い上げています。

彼女たちが受け取る給与の相場は送り出し国からの要請によって徐々に値上がりしています。英語が得意な人が多く、人気のあるフィリピン人は月に650Sドル、インドネシアで月に550Sドル、ミャンマーで500Sドルとなっています。しかし、初めてシンガポールで働くメイドの典型的な例では、働く前に出身国のエージェントに配置料として給料の4カ月分、シンガポールのエージェントに2カ月分を前借りしており、働き始める際には雇用主が一括して両エージェントに支払い、この額をメイドの給料から天引きします。そのため、雇用主が負担する最低限の生活用品や食費を除いては、来星してから最初の6カ月は無給で暮らしている人々も多くいます。

休日については、2013年に、メイドに週に1度の休日を与えることが雇用主の義務とされました。それ以前に無休で働いて心身の体調を崩すメイドが多くいることが社会問題化したためです。ただし、法整備後も、埋め合わせの補償金を支払えば、休日を与えなくても良いとされています。

実際に、FASTが2015年に6カ国出身のメイド400人を対象に行った調査では、12%が無休、13%が月1日の休みしか与えられていないことがわかりました。特にインドネシア人メイドに限定すると、19%が無休で働いている実態が明らかになりました。

この中には、より多くの給与を得たいメイド側から、「休日はなしで働きたい」と頼んでいる例もあります。しかし、多くのメイドは解雇されることを恐れ、雇用主と対等に交渉する権利を事実上持ってはいません。雇用主から「休みはなしで働いてほし

い」と言われた場合に、断ることはなかなか難しいのが実情です。しかし、一般の労働者と同じように、健康に働き続けるためには週に1度くらいは身体を休めたり、外出して友人と話したりする時間が必要です。後述するトラブルを防ぐためにも、週に1度の休みは与えるべきだというのが、FASTをはじめとする支援団体の考えです。

4）メイドにまつわるトラブル

外国人メイドの増加に伴ってトラブルも多く報告されています。The Straits Times紙によると、2014年の1年間に26件の雇用主やその家族からメイドに対する虐待が裁判所で認定されています。2010~2014年の5年間では、計90件の虐待事件が発生しています。最近でも、頭や口をハンマーで殴られたインドネシア人メイドや、15カ月間カップラーメンしか与えられずに体重が29キロまで落ちたというフィリピン人メイドが雇用主夫婦を訴えた裁判が進行中です。

こうしたトラブルに進展し得る原因の一つに、両者の文化の違いが挙げられます。例えば、とあるミャンマー人メイドは、シンガポールの雇用主宅で「生まれて初めて洗濯機を見た」と話していました。電化製品もほとんどない山奥の出身、英語も堪能ではない彼女に雇用主は説明書を手渡し、洗濯をするようにと指示しましたが、洗濯機を一度回すだけの作業に彼女は丸一日を費やしたそうです。

特にインドネシアやミャンマー人メイドの中には英語が堪能でない人も多くおり、雇用主から簡単な指示を伝えるのにも大変な手間がかかる場合があります。また、家事労働では、雇用主の家庭それぞれでの習慣や、やり方があり、いかに優秀なベテランメイドであっても、「その状態に自分を合わせていくのには半年はかかる」と言います。この期間は、雇用主側にも根気が必要になるのですが、求めていた水準を満たしていないと腹を立てて怒りをぶつける雇用主もいるようです。

その逆に、メイドから雇用主やその子供に対する暴力事件も度々問題となります。最近では、雇用主が設置した監視カメラが撮影した、子供を叩くメイドのショッキングな映像がネット上の動画サイトにアップロードされ、話題になりました。また、メイドの心の病や自殺も報告されています。

FASTでは、各国語の通訳を入れた24時間のヘルプラインを設置しており、メイドから月平均120件ほどの相談の電話が舞い込みます。そのうち最も多いのは「孤独」に関する質問です。さみしいので友達がほしい、誰でもいいから話し相手になってほしいという相談も多く寄せられます。慣れない外国での住み込みという特殊な労働環境下で彼女たちがストレスにさらされていることがわかります。

裁判や警察沙汰にならないまでも、トラブルを抱えて家を逃げ出すメイドも多くいます。FASTなどの支援団体では避難シェルターを設けて保護し、雇用主との仲裁や帰国の手続きをサポートしています。

5）メイドを雇うには？

様々なトラブルがあるにせよ、育児や介護を手伝ってくれるメイドの存在は心強いものです。メイドを雇ってフルタイム勤務を続けている、とある日本人女性は「たとえ夫が部屋に洗濯物を投げ散らかしてもイライラしないで暮らせる。夫婦円満の秘訣」と話していました。メイドを雇ってみたいと考えている方々のために、一般的な手順をまとめてみました。

①MOMの雇用主向けオリエンテーションを受ける

3時間のプログラムでオンラインでも受講可能です。

②メイドエージェントに連絡

星の数ほどあるエージェントから、信頼できる会社を見極めるのは困難かもしれません。一つの基準は安すぎないこと。あまりに安すぎるエージェントの場合、その分メイドに多額の借金を負わせているところがあります。また、料理や掃除、英語などのトレーニングプログラムを受けさせているかどうかも選ぶ基準になるでしょう。

③エージェントでメイドを紹介され、面接

トランスファーメイドと呼ばれる、雇い主が変更になるメイドの場合は事務所などでの面接が可能です。その場合は履歴書が参照でき、前の雇用主に連絡をして直接働きぶりなどを確認することができま

す。トラブルを起こして解雇されていないかなどよく確認すると良いでしょう。

一方、海外から新規に呼び寄せることも可能です。この場合、スカイプなどで面接し、雇用契約を結んでから呼び寄せることになり、勤務開始まで一カ月ほどかかる場合もあります。航空券代などを支払う必要があります。

④雇用契約を結び、メイドの労働ビザを申請する

エージェントが代行します。なお、エージェントを介さずに直接雇うことも可能ですが、ビザ申請や契約書類の作成などの事務作業を自分でしなくてはなりません。

⑤雇用、勤務開始

通常の雇用期間は2年で、更新の際に15日程度の休暇を与える契約が推奨されています。給与は多くの場合が雇用主からメイドに直接手渡されます。

では、気になる費用はいくらぐらいでしょうか?主な支払い例は以下の通りです。

・エージェント手数料（0~2500ドル程度まで様々）
　呼び寄せの際の航空券代、健康診断費用、書類作成費用、オリエンテーション費用、出身国のエージェント手数料、配置料などが含まれている。配置料や出身国での手数料はメイドの給与から天引きする
・帰国の航空券代
・メイドの給料（月額500~650Sドル程度）
・メイドの3食の食費や生活用品の費用
・雇用税（通常月額265Sドル）
・医療保険（最低1500Sドル分の保障内容）
・災害・障害保険（最低4万Sドル分の保障内容）
・MOMへの保障金（5000Sドル、メイドが行方不明になったりした場合は没収）
・フィリピン人の場合、フィリピン大使館への7000Sドルの保障金（保険も用意されている）

6）トラブルを回避するために

メイドの勤務時間や内容、給与などは、雇用主とメイドが個別に交わす契約書に基づいて決まります。ほとんどのエージェントでは契約書のひな形を用意しており、雇用主側もメイド側もよく見ずにサインしてしまう例も多いようですが、注意が必要です。

例えば、「労働時間は何時から何時」と記載がある場合、深夜に緊急でお願いしたいことが発生しても契約上は働かせることはできないことになります。実際には頼めば快く受け入れてくれるメイドも多いのですが、あくまでもそれは善意によるもの。彼女たちから見れば、断られて憤慨する雇用主は「お門違い」に映ります。もしお願いしたいのであれば「緊急時には対応する」など例外条項が契約できちんと設定してあるかなど、確認したほうがよいでしょう。家事労働では、責任範囲が曖昧になりがちですが、通常のオフィスでの雇用契約と同じように、「サービス残業」を押し付けるのは、トラブルの元になります。

また、一部のエージェントでは残念ながら「英語が堪能」「料理が得意」などとメイドの能力を水増しして紹介することもあります。雇用主側は何をしてほしいのか、そのメイドには何ができるのか、メイド本人やエージェントとよくコミュニケーションをとりながら面接で確認し、契約内容をよく練り上げることが必要です。

子育てのためにメイドを雇う人々にとっては、子供の安全がきちんと確保されているのかが最も気になる点でしょう。

実際にシンガポール人の雇用主たちの中には、部屋に常時監視カメラを設置して外出先からもメイドの働きぶりを見張っている人も多いのです。2015年にはトイレや風呂の中にまで監視カメラを設置している雇用主に疑問を呈する話がThe Straits Times紙上で取り上げられ、大きな論争になりました。FASTでは人権侵害とまでは言えないにしても、監視カメラの設置は雇用主とメイドの人間関係を構築する妨げになるとの声明を発表しました。「信頼されていない」と感じながら働くのは誰だってつらいものです。また、別の理由もあります。あるフィリピン人メイドは「監視カメラを雇用主がずっとスマホ画面で見ているから、サボりたい時には監視カメラの電源を抜く。雇用主はWi-Fiの不調だと思って

電話をかけてくるから『おかしいですね』といって再起動するの」と話していました。たとえ家の中に監視カメラがあったとしても、その有効性は完ぺきではありません。であるにも関わらず、人間関係を壊してまでカメラを設置するのはメリットが薄いものです。

結局、雇用主にできるのは、安全な子育てのスキルを高めてもらうようにサポートすること、また、虐待予防策としては、きちんとメイドに休日を与えて心身の健康を保ってもらうこと、お互いの信頼関係を構築すること、コミュニケーションを取って不安や不満がないか確かめることに尽きると思います。

6）トラブルを回避するために

24時間ヘルプラインのほかに、FASTでは各種団体と連携してメイド向けのトレーニングプログラムや、休日を過ごすことができるクラブハウスを設置しています。

トレーニングプログラムは、料理や掃除、育児、介護技術などメイドとしての仕事の能力を高めるもの、英語や中国語などのほか、将来故郷に帰って仕事をするために役立つ起業ノウハウやプレゼンテーション、経理などの授業も安価で用意しています。

プログラムでは、講座の費用を支払ったり、宿題を手伝ったりする雇用主も少数ながらいます。メイドは雇用主に感謝し、お互いに良い関係を構築することに役立っています。

一方、クラブハウスは休日に集まって友達を作り、自由におしゃべりしたり、ヨガやダンスの教室に参加したりすることで、孤独感を癒し、ストレスを解消してもらうことを目的にしています。また、ハリラヤや旧正月、クリスマス、日本のお正月などの文化を体験し、理解してもらうイベントも行っています。どれも非常に地道な活動ですが、FASTでは大きなトラブルに発展する前の予防策としてとらえています。

メイドにまつわる仕事の中で、結局のところ、雇用主、メイド双方に求められているのは相互理解とリスペクトに尽きるというのが私の感じたことです。メイドを雇用される方々は、各種の支援団体も利用してトラブルを防ぎながら、上手にその力を活用していただきたいと考えています。

「餅つき大会」の様子

執筆者氏名

石澤 由梨子（いしざわ ゆりこ）

経歴

2005年に慶應大学総合政策学部を卒業し、毎日新聞入社。社会部などで記者として働き、2013年に退職して来星。2015年から外国人メイドと雇用主の双方を支援するNGO団体、Foreign Domestic Worker Association for Social Support and Training（FAST）で広報とトレーニング業務に従事。2016年4月に帰国し、現在はThe Huffington Post Japanニュースエディター。

メガFTA時代に於ける サプライチェーンと関税管理の在り方

EY Solutions LLP
International Tax Services, International Director
上田　憲治
EY Advisory Pte. Ltd.
APAC Advisory Centre, Executive Director
深田　アレン

メガFTA時代の幕開け

2015年10月、長年に亘りかつ多難を極めた環太平洋戦略的経済連携協定（別名、環太平洋パートナーシップ協定。略称、TPP）の交渉が大筋合意に至り、本年2月4日に参加12各国間で署名された。これを以って、太平洋を囲む形で北南米、アジアおよびオセアニア域内にて一大「自由貿易圏」の形成に向けた最終過程に入った。アメリカ大統領選や日本の国会に於いてもTPPの是非に関する白熱した議論が繰り広げられ、主要国での批准までにはまだ予断を許さない状況が続いているが、安部首相やオバマ米大統領はTPPの批准をそれぞれの政権の主要政策課題と位置づけており、いずれは実行されるとの見方が主流である。

TPPが実行されると、一部関税の引き下げが段階的ではあるものの、ヨーロッパ経済圏以外では、近代史上最も貿易が自由化される環境が整う事となる。参加国のみならず、その周辺国への影響も大きく、今後の貿易、如いては経済活動に多大な変化をもたらす事となり得る。日本の外務省はTPPをして「高い水準の、野心的で、包括的な、バランスの取れた協定」[1]と位置づけている。確かにTPPの内容を見る限り、「野心的」であるか否かはともかくとしても、包括的要素の多い協定と言って良いであろう。

ただし、TPPは近年その締結が大幅に増加している自由貿易協定（Free Trade Agreement-FTAまたはRegional Trade Agreement-RTA）の一つに過ぎないとも言える。特定の国・地域間で関税およびその他の貿易制限的な措置を一定の期間内に削減することを定めた各種貿易協定はWTOに報告されているもので419存在する。[2]　アジア太平洋地域においても様々な（二国間および地域間）FTAが発行済みまたは交渉中である（図1参照）。昨年12月31日に発足したASEAN経済共同体（AEC）は特に記憶に新しいが、域内では1998年からASEAN物品貿易協定（ATGIA）が自由化の礎となってい

図1 アジアに於ける署名済み主要FTA

ASEAN	韓国	日本	中国
ASEAN域内（AEC・ATIGA)	ASEAN（2国間含む）	ASEAN2国間含む）	ASEAN(2国間含む）
中国	中国	メキシコ	豪州
日本	インド	ペルー	NZ
韓国	豪州	チリ	韓国
インド	NZ	インド	パキスタン
豪州NZ	EU・EFTA	豪州	ペルー
TPP（米・墨・加・ペルー・チリ）	トルコ	モンゴル	チリ
EUベトナム	米国	スイス	コスタリカ
	カナダ	TPP（米・加・NZ）	スイス
	ペルー		アイスランド
	チリ		

る。また、日・ASEAN協定やASEAN・印協定等の現存協定以外にも東アジア地域包括的経済連携(RCEP)、日中韓、日・EU、ASEAN・GCC、韓・メキシコ等の主要協定が交渉の只中にある。つまり世界レベル、そして特にアジア太平洋地域は「メガFTA時代」に突入したと認識すべきであろう。

各種FTAの内容やその活用方法に関しては後段で考案したいと思うが、その重要性に関しては敢えて申し述べるまでも無いであろう。一部農産物や純然たる国内向けサービスを除けば、「地産地消」のみにて成り立っている産業は極めて少なくなった。特に日本企業が強みを生かし、さらに成長戦略を推し進めて行く為には国内向けの対応と併せて国外マーケットへの取り組みが必至である。否、すでに国外マーケットの占める割合が過半数を超え、日本国外で製品を作り、国外の他のマーケットへ供給して行く「外外」の構図が多くの業種、企業で普遍化している。つまり、いままで以上に複雑な商・物流の上に事業が成り立っている訳である。その中で、進化を続けるFTA環境を十分に活用する事が成否の鍵の一つになるであろう。

ところが、このメガFTA時代を味方に付け、最大限に効果を出して行く為には「関税を管理する」だけでは無く、包括的に事業モデルを考え、総合的なサプライチェーンを設計、実行して行く事が求められると筆者は考える。

メガFTA時代のサプライチェーンの最適化

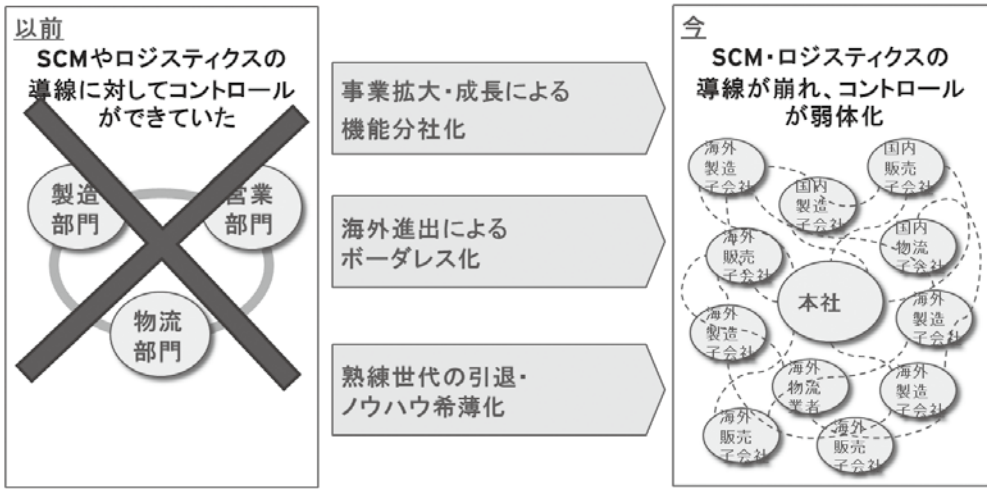
さて、我々がサポートさせて頂いている製造業等の会社様から比較的良くお聞きするのがグローバルサプライチェーン管理のご苦労の話しだ。

- グローバルSCMのガバナンスが効き難い
- グローバルあるいは地域レベルでのSCM統括機能が必要だと思うが、どこから手を付けるべきか分からない
- サプライチェーンの各種機能管理が分散している為、個別最適の積み重ねが相乗効果ではなく相反効果を生み出している
- 在庫情報とその源泉管理が分散しているので需給調整の弊害になっている
- 最適なサプライチェーン体制を構築しても、急変する環境の為、効果が維持出来ない

企業規模や経営資源、事業内容の差などは有れ、概ねどの企業に於いてもこの様なお悩みは有る。上記FTAの推移のみならず、根本的な市場環境変化、そして常時「次への対応」が求められる中に有っては当然なのであろう。下記の図2にある様に事業機能間の「導線」の確立・維持が困難である事は間違いない。

以前は製造、販売、物流、財務・税務等の主要機能が至近距離に有った為、それぞれ機能の部分最適を融合させる事でも相乗効果を生み出す事が可能で有ったかもしれない。ところが、事業領域の拡大や

図2 機能間導線の変化



それを取り巻く環境の変化が進むにつれ機能間の融合が非常に難しくなっている。特に日系企業では縦割り構造が堅ろうであるが故に超機能的なサプライチェーンの最適化が困難な傾向も見受けられる。

上記でも書き述べた通り、メガFTA時代のメリットを最適化するには包括的な事業モデルとそれを支えるサプライチェーンを総合設計する必要がある。表現を変えると、Operating Modelの変革を各種事業要素を複合的に検討、設計、導入および管理して行く事が重要である。

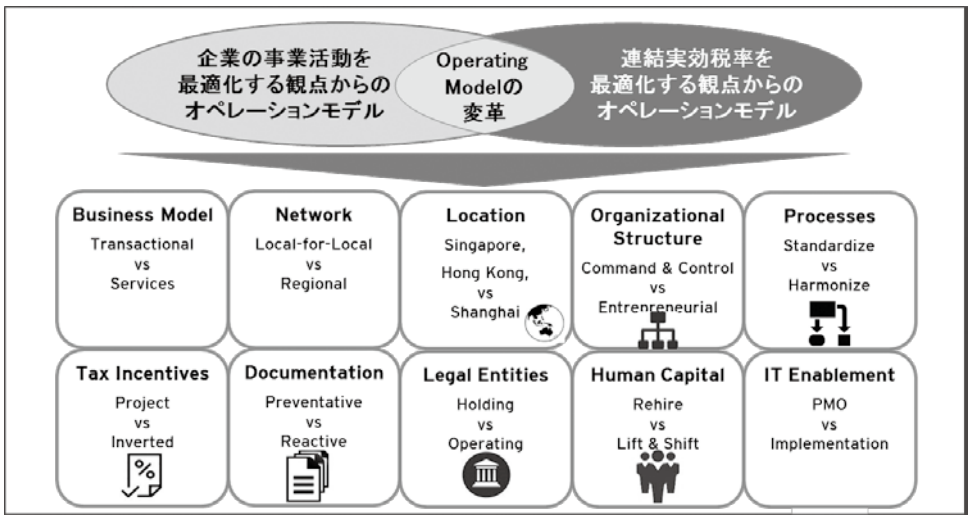
Operating Modelを考えるにあたっては下記の図3の様に多くの可変要因の検証が必要となる。ビジネスモデルの定義は言うまでもないが、その他、下記の要因を相関関係も考慮しながら検討して行く。

- Network: 国内vs域内vsグローバル
- Location: 生産国、消費国、業務機能配置国（例、シンガポールvs香港vs上海）
- Organizational Structure: 組織体系（局集中型vs現地主導型）
- Processes: 統一プロセスvs類似プロセス
- Tax & Incentives: 各種税務および優遇税制
- Documentation: 機能定義の性質（未然防止vs事後対応型）
- Legal Entities: 各種法人（ホールディングvs事業会社）
- Human Capital: 人事方針
- IT Enablement: 情報システム部の役割（PMOvs実行）

これら複数の要因を連動的かつ統一の体制化で検証して行くことにより、次世代のOperating Modelとその具現化の一つであるサプライチェーンの体制が見えて来ると考えられる。従来は個別機能をその専門性の枠の中で改善していたが、メガFTA時代に於けるサプライチェーン管理はその専門性を有機的に繋げてさらに大きな「個」を形成して初めて効果が発揮されると勘案される。

急にスポーツの比喩になって恐縮だが、上記を日本サッカーに置き換えて考えてみよう。1993年10月に日本代表がFIFAワールドカップアメリカ大会出場を逃した、いわゆる「ドーハの悲劇」をご記憶の方も少なくは無いと思う。これを境とするように、日本サッカーは大きく進化を成し、1998年ワールドカップを筆頭に5大会連続出場を遂げている。筆者は全くのアマチュアであるが、この23年間の日本サッカーを見て来た中で幾つか潮流の変化を感じる。ドーハでの予選敗退以降、日本は一握りのスター選手はともかくとしても、主に国内リーグ経験者から形成されたチームが一丸となって勝つ方程式を確立した。その後はワールドカップでの活躍も有り海外でプレーする選手が増え、体力や技能面でも「個」の力量を世界レベルに高めて行く事が可能となった。ところが、最近では海外経験選手をより多く輩出しているにもかかわらず、アジアチャンピオンの地位を維持する事が厳しくなっている。世界的にサッカーのレベルアップが進んでいる事実もあるが、多くの評者が日本サッカーは「個」の力をより

図3 Operating Model設計



例：　タイへの自動車部品（サスペンション部品）の輸入

サプライヤー	米国	日本	韓国	中国	インド	マレーシア	ベトナム
価格	100	100	95	90	90	90	80
FTAの有無	無	有	有	有	有	有	有
関税率	30%	0%	24%	30%	30%	0%	0%
調達コスト	130	100	117.8	117	117	90	80

有機的に繋げ、全員サッカーでの勝ちパターンを再確立する事が必要だと言っている事を耳にする。また、個々のポジションの専門性を高めるだけでは無く、場合によっては役回りを入れ替えて状況に対応する事も求められているらしい。

実は日本サッカーと効果的なサプライチェーンの変遷には根底で共通するものが有るのかもしれない。以前は監督・コーチ陣（＝本社）の明確な管理化、強力な連帯感をもって総合力を発揮する事が出来た。その後、選手が世界各国へ展開（＝海外市場への進出）して力量を高めて行き、自身の成長のみならず国内リーグへもプラス効果をもたらす様になった。しかし、ここに来て専門性や技量が高まった選手（各種機能）を一致団結したチームに纏め上げる総合力が勝敗の鍵となっている。SCMにおいても企業内の様々な機能の最適化を進めながらも、最後はOperating Modelと言う「チーム」としての最適化を最優先とする経営、管理体制が成否の鍵となると考えられる。

メガFTA時代に於ける関税節減とコンプライアンス

少し抽象的な内容になってしまったが、ここでFTAを活用し関税を効果的に削減して行く可能性について考察してみたい。本文序文でも記載した通り、アジア太平洋圏での各種FTA、RTAの交渉や発行は増えているが、最恵国待遇（Most Favored Nation Treatment; MFN）による税率低減は殆んど無い。従って、総合的にサプライチェーンコストの最適化を図るためにはFTAを最大限に利用する事が必要である。FTAの有効活用には主に下記の三つの応用が考えられる。

調達コストの削減

FTAを効果的に利用することにより、調達コスト（＝製造原価、販売原価）を大きく削減できる可能性があり、生産・調達戦略の主要因の一つとなる。下記の簡単な事例では仕入価格と関税の二要因を元にサプライヤー選定を行う場合をシミュレーションしてみた。

- ○　サプライヤーからの仕入価格は高くても、有利なFTAがある国から調達、ないしはその国で製造した方がコスト削減効果が高い場合もある
- ○　同じ製造国であっても、利用するFTAにより、税率が異なる場合がある
  - 日・ASEAN EPA利用時の関税率は30%（引き下げなし）だが、日タイEPA利用時の関税率は0%となる

    （注）タイ国内での自動車の製造のため、又はタイの自動車メーカーに納品する部品メーカーによる部品製造のために、当該製造者が輸入した場合に限られる
  - 関税は段階的に引き下げられるため、5年後、10年後に有利な国は異なる場合がある

生産国の選定

生産国の選定には多数の検討要因が有り、それぞれの業種、業態、製品や主要仕向け地によって優先順位の付け方が大きく変わることは言うまでもない。ただし、諸条件が均衡している場合や総合的に甲乙が付け難い場合、FTAの有無や利用の利便性が「議決権」となり得る事もある。それらを検討するにあたり、下記の項目などが検討対象となる。

▶FTAの有無

- ○　生産国は主要な市場と有利なFTAを締結しているか?（主要な市場向けに、高関税を支払わずに製品を提供できるか）
- ○　生産国は主要な部材提供国と有利なFTAを締結しているか?（製造に使用する部材を高関税を支払わずに調達できるか）
- ○　関税引き下げスケジュール　（中長期的に当該製造国は関税面で優位性を保つか）

▶FTAの利用の容易性

○ FTA利用時のコスト
- 原産地証明書の要否、発行料

○ 原産地規則
- 付加価値基準 / 関税番号変更基準 / 加工工程基準
- 累積の可否

○ 三角貿易の可否

○ その他利用上の制約

サプライヤーの選定

FTAの有無やその活用は生産国の選定と併せてサプライヤーの選定にも有用な検討要因となる。サプライヤー所在国-生産国間の関税の有無は言うまでも無いが、生産国から先、つまりは消費国での関税効果にも影響する。

▶製造に利用する部材・原材料の調達コストの比較だけではない

○ 輸入部材を使用して製造した製品をFTA締約国に向けて輸出する場合、部材の調達先の選定に際して、製品のFTA利用条件（特に原産地規則）の充足も考慮する必要がある

○ 最終製品をASEAN・中国FTAを利用して中国に輸出する場合には、多少調達コストが高くなっても、日本産部品より中国産部品を利用した方が有利な場合もある

FTA利用に於ける留意点

FTAを最大限に利用して行く必要性に関しては異論は少ないであろう。参加国が自国にとって有利となると判断した上で各種FTAが締約されている以上、その利用は国策に準拠する活動とも言える。ところが、FTAの有効活用には企業側に確固たるコンプライアンス体制が求められる事も忘れてはならない。

メガFTA時代の当然の現象としてFTA申請量が膨大となり、輸出国当局の審査作業が大きく増加している。当局はその対応の一環として、原則として申請者がFTA条件を熟知し、内部コンプライアンス体制を有している前提で原産資格の審査を行っている。しかし、複数の類似したFTAが乱立するAPAC地域では、企業による原産地規則の誤認や違反が発生し易い事も否めない。関税担当者の間ではこのFTAの乱立状態をスパゲッティボウル現象と呼び、原産地管理が更に困難となっている事に警鐘をならす。原産資格を有しない製品に原産地証明書が発給されることも発生し、輸入当局からの検認（Verification Request）が急増し、また、自己証明制度の採用の結果、更に違反が増加する環境を形成している。今後は輸入当局による原産資格の検認業務も厳格化する可能性があり、益々の管理体制が必要となる。

そこで幾つかの留意点が浮上してくる。

▶資料の作成・保管の重要性：原産地基準を充足していることを示す上で有効な資料の作成と保管が必須となる。該当資料にはBOM、加工工程表、部材の購入原価、等が一般的であるが、既存の資料のみで十分とは言えない事もある。

○ 原産地、関税番号等が記載されていない

○ 原産地は記載されていても、利用しようとしているFTA上「原産」とみなされるものであるかどうかまでは判断できない場合が多い

また過去の資料の保管とそのアクセスにも対応が求められる。

○ 原産地基準を充足していることを示す資料は、通常税法等で保管義務の対象とならない
→ 保管に関する社内ルールが存在しない場合が多い

○ システム化が進んでいる分野でもあり、紙への出力がなされておらず、システム内のデータは常に最新のデータに上書きされている
→ 過去において原産地基準を充足していたことを証明できない

▶年度末移転価格調整の取り扱い：移転価格税制への対応のため、年度末に対象製品につき、遡及的調整金が発生する場合がある。この場合、調整後の価格が適正価格であるとして、調整後の価格でFTAの原産地規則が計算されるべきと解釈される可能性がある。また、FTA申請時には原産資格を有している場合でも、完成品または原材料につき、移転価格調整金が入った場合、FTAの原産資格に影響が出る可能性に

留意する

▶中間製品の取り扱い:原産基準の考え方にある「ロールアップ」とは、内製される中間製品につき、その中間製品がFTA原産基準を満たす場合に、その中間製品の価額全体を「原産部品」として取り扱う考え方である。ところが、FTAによっては、明示的に内製部品のロールアップに関する規定がない場合もあり、ロールアップに対する当局間での様々な解釈が存在するリスクがある

▶直送要件:輸出国の原産品が輸入国に到着するまでに、原産品としての資格を失っていないかどうかを判断する基準であり、以下に該当する場合は一般的に原産品とみなされない

- ○ 輸出締約国の区域外において、引き続き生産その他の作業（積卸し、蔵置、産品を良好な状態に保存するための作業等を除く）が行われる場合
- ○ 産品が第三国にある間、当該産品が当該第三国の税関管理下に置かれていない場合
  また、中国製品について、ACFTAを利用してASEAN諸国に輸出する際、香港を経由することがあるが、香港はフリーポートであるため、経由時に税関管理下に置かれない場合があり、直送条件を満たさないと判断される事がある

この様に、ASEANを中心にリージョナルFTAが存在し、更にTPP、日中韓FTA、RCEPに向けた動きにより地域・多国間FTAが部分的に重なりつつ別個に並存する状況は、企業に多くの関税コスト削減機会を提供する。その一方、FTAの規則が似通っていることもあり、FTAコンプライアンス違反が発生しやすい状況でもある。そのため、FTA利用に当たっては厳格なコンプライアンス体制の導入が重要となる訳である。

関税管理とITデータ

さて、関税管理とそれに向けたコンプライアンス体制を考慮するにあたり、一つ強力な武器がある。ITデータの活用である。各輸出入拠点における輸出入の実態を正確に把握することはデータを掌握するための工数不足も有り、困難と見られる向きも多いかもしれない。ところが、昨今では国際貿易にかかる多くの情報の電子化・リッチデータ化が進んでおり、正確なデータ分析を行う環境が整いつつある。対象国の法規制によって差異はあるが、下記源泉の組み合わせから相当規模のデータ入手が可能である。

- 税関が保管している輸出入申告データ（注、残念ながら日本では不可）
- 通関業者が所有する輸出入申告データ
- 企業のERPデータ
- GTM（Global Trade Management）データ

これらのデータソースには様々な輸出入データ項目が含まれており、各種分析に活用できるのである。

- 輸出入件数、通関件数、関税VAT支払額、サプライヤー・通関業者の数、
- 輸出入申告日、輸出入官署、輸出者名、サプライヤー名、通関業者名
- 取引価格、通貨、インコタームズ、輸送手段、海上保険の有無、加算要素の有無
- 貨物名、HSコード、数量、原産地、
- FTA利用の有無、減免税制度活用の有無、延納制度活用の有無
- ECCN、他法令届出の有無、等

この様に、企業内外に存在する輸出入データを整理し、その内容を経営情報として
意味のある形に「見える化」することで、企業の輸出入に係る下記論点を洗い出すことが可能になる。

- 関税コスト削減の抽出
- 更正の請求の可能性
- コンプライアンスリスクの抽出
- サプライチェーンの効率性の向上

またこれにより、関税のみならず、サプライチェーン全体に関するより正確なマネジメント判断が可能になる。輸出入データを「見える化」し、一元管理することで、日々の輸出入で生じる関税コストを即時に把握すると同時に、サプライチェーン上に潜む関税リスクに対しても正確な対応が可能になる。関税支払状況、節税機会、コンプライアンスリ

スクなどの定量分析を実施することで、当該データはマネジメント判断にかかる重要な検討材料になり得るのである。

まとめ：メガFTA時代に於ける航海術

我々は今、さらなるグローバル化と自由貿易環境に身を置き、その激流の中で如何に成功を継続して行くか組織力を試されている。各種FTAの実行はすなわち、より多くの港への寄港を可能とし、今まで以上に世界市場をアクセスする為の追い風となっているのである。大袈裟な表現かもしれないが、謂わば新たな「大航海時代」の幕開けだと言えるだろう。ただし、その追い風を効率良く活用して船を前進させる為には、幾つかの重要な「航海術」が求められる。

- ▶包括的管理：長期航海において船舶を総合かつ包括的に管理し、目指す港や積荷をも勘案して計画立案する様に、企業のサプライチェーンも総合設計が必須である。個別機能をそれぞれの担当者が専門性を以って管理するだけではなく、それらを同一の指揮下で纏め上げる事により恒久的な成功が可能となる。
- ▶緻密な情報管理：新たな寄港地には目に見え難い様々な暗礁が隠れている事がある。それらの情報を事前に掌握し、そのリスクを未然に防止する為の体制を徹底する事も必須である。専門の「見張り役」を立てると同時に、場合によっては専門の水先案内人を招き入れる事も有用であろう。各種FTAとその諸条件を徹底管理するコンプライアンス体制はその最もたるものであり、必要に応じて社外専門家のアドバイスを導入する事も良案である。
- ▶最新の航海機器：船やそれを取り巻く環境が大きく変わる中で、航海管理機器が進歩するのと同様、メガFTA時代にはITデータ管理ツールが質量共に普及している。これらのツールを積極的に取り入れ、より効果的に情報活用をしながら支払い関税を削減し、如いてはサプライチェーン全体の最適化を図る事が可能となる。

多くの可能性と同時にリスクも介在するメガFTA時代であるが、企業・組織としての総合力をもってさらなる飛躍の追い風となる事を期待したい。

追記：本文作成にあたってはEY税理士法人、大平洋一パートナーおよびEYアドバイザリー株式会社の羽柴崇典シニア・パートナーに参考資料提供等の協力を得ました。感謝致します。

＜参考＞

1）http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/tpp/

2）Source: WTO Secretariat

執筆者氏名

上田 憲治（うえだ けんじ）

経歴

太田昭和監査法人（現新日本有限責任監査法人）を経てEY税理士法人に入社。M&Aや企業組織再編を中心に、デュー・ディリジェンス業務からストラクチャリングや実行支援業務まで幅広く携わっている。また、オーナー企業向けの事業承継対策・財務体質改善業務、連結納税の導入支援業務に深く関与している。2015年6月よりEYシンガポールへ赴任し、日系企業向け税務サポート業務を担当。

執筆者氏名

深田アレン（ふかだ あれん）

経歴

約30年に亘ってビジネスコンサルとBPO（業務委託）事業に関与。ベインキャピタルの事業会社、IBM、DHLを経て2015年よりEY APAC Advisory Centreにて日経企業向けアドバイスを担当。特に地域統括体制の設計・導入やサプライチェーン再編などを中心に、人事関連からITコンサルまで幅広く対応。各種セミナーや業界向けカンファレンスで講演。在星歴18年。

ワインセレブへのステップ

La Terre Restaurant Pte Ltd
Owner Sommelier
川合　大介

はじめに

国際都市シンガポールでは、国籍をはじめ様々なバックグラウンドの取引先や友人とワインを楽しむことも多いのではないでしょうか。ワイン好きな方にリードしてもらいながら食事にあうワインを選んでもらうことも多いかと思います。

そんな時、もうちょっとだけワインや食事との合わせ方等について知っておきたいと思われたこと、ありませんか。

当地のレストランではソムリエがいるお店、いないお店、さまざまですが、ソムリエに相談するのもちょっと不安、心配、そんなこと思われたこと、ありませんか。本稿では、シンガポールのワイン事情にも触れつつ、今までよりももう少しだけワインを楽しみたいとお考えの方に、いくつかのポイントをお伝えできればと考えています。

もう一つ、当地のレストランでサービスの質について、皆様もいろいろとお感じになることが多いのではないでしょうか。長らく飲食サービスの現場に従事してきた身としては、培ってきた経験やお客様とのやりとりを通じて養われてきた感性が、シンガポールの飲食サービス現場に多くの示唆をもっていると感じています。これらを当地の人たちとも共有し共感を得ながらここまで歩んできた道のりと私自身が今考えている将来の可能性もお伝えすることで、皆様のお仕事面でも何らかのヒントとなれば幸いです。

シンガポールのワイン事情

皆様がよくご存知の通り、シンガポールが世界中から人や資本を引き寄せ、世界でも有数のビジネスハブとなっていることは、改めて説明の必要はありませんが、ことワインに着目するとどうなっていると思われるでしょうか。シンガポールはご想像の通りワインの全てを輸入に頼っていますが、表1の通り、統計で見てみると輸出も相応にあって、いわば、ワイン貿易の中継地となっていることが推測されます。

単純に輸入から輸出を引いた数値を国内の需要と考えるとすると、13,185トンであり、人口一人当た

【表１：シンガポールのワイン需要推移】

Year	2010	2011	2012	2013	(Unit)
輸入	23,534	26,824	27,924	29,422	tonnes
	372,609	478,861	474,121	527,701	k USD
	15.8	17.9	17.0	17.9	$/kg
輸出	11,804	13,849	15,286	16,237	
	270,356	358,476	428,393	409,228	
	22.9	25.9	28.0	25.2	
輸出入差 (みなし消費量)	11,730	12,975	12,638	13,185	tonnes
人口	5,079	5,191	5,300	5,405	k
一人当り消費量	2.31	2.50	2.38	2.44	kg/person

りで換算すると、年間消費量が3本程度である日本と比べても遜色ない状況なのですが、一言でいえば、当地のワイン文化はまだまだ発展途上、といってもよいのではないかと感じています。

2010年の来星以降の私の経験に基づく感覚値ではありますが、レストランでワインのオーダーを頂くのは白ワインであれば、ほぼシャルドネ、といっても6割以上は赤ワインのみで通されるお客様が多く、多くの方が紅白ともいろいろな品種をお料理に合せながら楽しむ傾向が強まっている日本と比べるとまだまだ浸透していないと思っています。

もちろん、酒税の影響も含めて当地ではワインは割高に感じられることも、酒量の多寡に影響を及ぼしているものと考えられ、一概には言えないものの、後でも述べますが、魚料理と白ワイン、肉料理と赤ワイン、という組合せをややもすると機械的にオーダーされる方がまだ多い印象も持っています。もちろん、シンガポール自体が一大観光地ですので、食事をしている方の傾向が当地で暮らす方の嗜好ではないことも含めて、当地なりのワイン事情、と受け止めて頂ければと思います。

ワインをより楽しむために、もう少しだけ知っておきたいこと

ところで、世界中で5千種に及ぶぶどうの品種、その中でワインに使われるものだけでも300種類あるとも言われるワインですから、今日飲んで美味しかったワインが次に訪れる別のお店にあるとは到底思えません。とはいえ、やはりワインが美味しいと言われる国の料理はワインとの組合せを考えると、食事の場はより一層豊かになり、充実した時間を楽しめるのではとお感じになることはごく自然なことだと思います。

ただ、ワインについて皆さんが感じられるハードルの一つに「いろいろ覚えることが多くて難しそう」という印象をお持ちなのではないでしょうか。

どうしたらもっとワインを楽しめますか?という質問に私がいつもお伝えしているのは次のポイントです。ワインを楽しむには、ワインを知ること。みなさんがワインを知るために必要なことを全部で10とすると、優先度合いの高い順番に、5がぶどうの品種、3がワインの生産地、製法とヴィンテージ（生産年）がそれぞれ1ずつくらいですよ、と。しかも第一歩の品種も、まずは白3種類、赤4種類でいいのです。それぞれの詳しくは後述しますが、大切なのは、それぞれの味わいの違いを頭の中でイメージできるように印象づけることです。

同じ口にするものとしての例としてちょっと考えて頂きたいのですが、皆さんは、お寿司のネタの味、例えばトロやタイ、サーモンの違いを直ぐにイメージできるのではないでしょうか。ワインにおけるぶどう品種の味わいの違いも、この感覚に近いものを持てればよい、ということになります。お寿司の例は、私達が長年摂りなれた食べ物の味を想像できるものですので、残念ながらワインに対してこの感覚を身につけるための即効薬はありませんが、飲み比べられる機会を意識的につくって一度試していただくと非常によい経験となり、ますますワインについての関心が高まること請け合いです。

それでは押えたい7つのぶどう品種です。白は、シャルドネ、ソーヴィニヨンブラン、リースリングの三種類、赤は、カベルネソーヴィニヨン、ピノノワール、シラー、メルローの4種類となります。

それぞれのごく主だった特徴は表2の通りですが、この7つの品種のそれぞれの味わいの特徴をイメージできるだけで、今日そのレストランやご家庭

【表２：押えたい７つのぶどう品種と特徴】

種類	ぶどう品種	特徴
白ワイン	シャルドネ	シャブリなどのミネラル豊かな辛口、作り方にもよるが非常にコクのある辛口ワインとなる。
	ソーヴィニヨンブラン	清涼感のある、フレッシュで爽やかな辛口ワインとなる。
	リースリング	オイリーなテクスチャーが特徴、辛口から甘口まで幅ひろいワインとなる。
赤ワイン	カベルネソーヴィニヨン	タンニンが楽しめる重厚なワインとなる。
	ピノノワール	気品のある香り、フルーティー、エレガントで飲みやすいワイン。
	シラー	濃厚でスパイシー、カカオを思わせるような甘い香りも。
	メルロー	カベルネ・ソーヴィニヨンと似て重厚だが、より丸みのあるワイン。

で食べたい料理と合うワイン、あるいはワインリストから気になるものを選んでから料理を選択してみる、といった楽しみ方が可能になります。

料理とのペアリングのコツ

当地のちょっとした傾向として、ややもすると固定的なペアリング（食べ物とワインの組合せ）が見受けられるとお話ししました。もちろんこのぶどう品種にはこの料理が合うというペアリングのガイダンス自体、否定するものでは全くありませんが、それらを覚えこむというのはなく、自らのワインの味のイメージをもっと自由に料理と絡めて想像を膨らませることで一層ワインが楽しめる、というのが私の考えです。

ペアリングのコツとして覚えておいて頂きたいことは、軽い味の料理には爽やかなワインを、濃い味の料理にはしっかりしたワインを。そして複雑な味わいの料理には複雑な味わいのワインを、ということだけです。但しこれはガイドラインであり、絶対ではないとお考え下さい。

例えば、当地ではシンガポール料理、中華・マレー・インド料理などいろいろな料理が楽しむことができます。それぞれにワインとは異なる、その料理の歴史と切り離せないお酒がつきものかと思いますが、これらのいわばローカルフードと当地にとって輸入文化であるワインを上手に組合せるとしたらどうすればよいでしょうか。

例に挙げたローカルフードは、スパイスの効いた料理が多く含まれています。スパイシーと一言でいってもその味わいは多様ですが、そのスパイスでいわば舌が麻痺してしまう状況を中和して味覚を元に戻してくれる効果があるのは、リースリング、ゲヴュルツトラミナーといった少し甘みを含む白ワインです。また、チリクラブのようなお料理には口中をさっぱりさせてくれるスパークリングワインが合うと思います。これらのレストランでいろいろなワインが楽しめる機会があれば、トライして頂くのもよいのではないでしょうか。

ただ、もう一つペアリングの鉄則として挙げられるとすれば、それは「地のもの」を合わせる、ということになります。容易にご理解頂けると思いますが、食べ物とワイン、そしてワイン造りそのものも、その土地の言葉同様に、歴史を踏まえた文化そのものです。最も分かりやすい例で言えば、やはりパスタにはイタリアワインがよく合う訳で、和食も土地土地の名物料理とその土地の名産のお酒が最も合うのと同じです。更にもう一歩踏み込んでワインを楽しみたい方に、この後次のコツとして生産地について学んで頂く効用を簡単にご説明しますが、この生産地とその土地の名物、例えばシャンパーニュ（いわゆるシャンパン）とそこで造られるシャウルスという白カビチーズ、ブルゴーニュの赤であるジュブレシャンベルタンとラミ・デュ・シャンベルタン（「シャンベルタンの友達」という意味の名前）というウオッシュタイプのチーズを一緒に楽しんで頂ければ、その組合せの妙がお分かりいただけると思います。

更にもう一歩楽しみたい方へ

ここまでで、既にワインをより楽しむための半分以上についてご覧頂いてきましたが、やはり皆さんお気づきの通り、ぶどう品種ではない固有名詞、フランスワインの代表格ですとボルドーやブルゴーニュといったさまざまな言葉が、ワインの「難しさ」を助長してしまいがちです。ですが、是非この一歩に踏み込んで頂ければ、先にお伝えしたとおり、もう8割方がカバーされますので、あとしばらく、好奇心を維持してご覧頂ければと思います。

ワイン造りの歴史が長いヨーロッパを中心に、原産地呼称制度というものが確立されてきました。日本でも地名を冠したブランド食品が多々あるのでイメージ頂きやすいと思います。EUでは2009年にEUワイン共通市場制度の下、新たなワイン法の規定が発令され、2012年からラベル記載が改訂されていますが、知っておきたい原産地呼称としては、まずは「フランスのAOC」「イタリアのDOCG」という言葉を覚えて頂ければと思います。これらは、限られたワイン銘柄が、生産地区、ぶどう品種、製法等々を認定された上で、それらの条件を満たしている場合のみ表示することができるため、ワイン選

びの際の目印になるからです。

もしソムリエあるいはワインアドバイザーを目指すような方は、このような原産地呼称の中でも、それぞれの土地のどこにぶどう畑があり、どのような造り手がどのようにワインを製造しているかまでを知り、その違いに通じる必要がありますが、それはかなり深い知識です。皆さんに知っていただきたいのは、これらの土地で作られるワインの味わいのイメージ、すなわちぶどう品種とそれらの組合せによって、先に述べた7種の味わいに、さらに加えていけばよい、ということなのです。

例を挙げたボルドーでいえば、白はソーヴィニヨンブラン、赤はカベルネソーヴィニヨンとメルロー、ブルゴーニュでいえば白はシャルドネ、赤はピノノワールといったことです。これらフランスワインでは、ラベルに地名は書かれているものの、使用されているぶどうの品種が何であるかは書いていないため、味の特徴と産地を結びつけてイメージできることが大切になるのです。

ソムリエとの上手な付き合い方

いかがでしょう。やはりワインは難しいな、とお感じの方もおられるかもしれません。一方、ますますワインを楽しめそうだ、と思われた方もおられることでしょう。いずれにせよ、ソムリエがいるようなレストランに行かれる機会があれば、是非、本稿でご紹介したエッセンスをもとに、ソムリエに相談してみて頂ければと思います。

食べたいものとの相性であったり、あるいは飲みたいワインのイメージから入って料理を薦めてもらったり。

ソムリエといえば、ワインに精通しブラインドテイスティングでどこの何年ものかまで当ててしまうようなイメージが日本では強いかもしれませんが、もともとはフランスの王侯貴族に仕え、お城のワインを中心とする飲料一切の購入・管理を任されていたポジション（職務）を示す言葉でした。現在でもレストランでは水やコーヒー・紅茶やリキュール一切を任されているケースが本来の姿となります。多くのレストランでは飲料と食事のサービスをチームを分けずに行っているため、お店で提供できるワインについて然程詳しい知識がないことも多いでしょう。だからこそ、ソムリエがいる、というレストランであれば、ワインリストから選ぶ楽しみに、ソムリエに相談するという楽しみ方を追加して頂くとよいのではと思うのです。

私は日本で飲食のサービス現場でいわゆるウェイターを続けている中で日本ソムリエ協会の資格を取得しましたが、先の述べた飲料専業ではなく、飲食双方の給仕を行ってきました。ソムリエというポジションについたのは、実はここシンガポールに来てからのことです。今でこそソムリエとしての私、川合大介のイメージを、幸いにも多くの方にお持ち頂けるようになっていますが、実はソムリエを目指した、あるいはソムリエになった、という意識は未だに持っておりません。

確かに自らをソムリエたらしめるため、ワインはいろいろなものを試します。習うより慣れろ、本で勉強するよりも実際にワインを飲め、ということですが、この20年近くのキャリアにおいて、のべ1万銘柄に近いワインをテイスティングしてきたとはいえ、世の中のワインの1%も試せた訳ではないと考えています。食事もいろいろな料理・調理方法を研究します。全てはワインとの相性をイメージできるようにするためですが、基本は、先に述べたワインの楽しみ方の延長線上に過ぎません。

みなさんには是非気軽に、今日の食事の雰囲気をいかに豊かにしたいかを、ソムリエに相談してみて頂きたいと思います。

シンガポールや近隣国大都市での可能性

当地にきてからソムリエとしていくつかの表彰を頂戴しているうちに、クアラルンプールや香港でのイベントに声をかけて頂き、ワインや日本酒のイベントにゲスト参加させて頂くことが増えてきました。他のアジアの大都市でローカルの方々のワインへの関心が高まりつつあることは、改めてご説明せずともお分かり頂けると思います。

一方で、こうした盛り上がりの反面、飲食のサービス現場レベルではまだまだ改善の余地を感じてし

まうことが多いのは、私が現役の飲食サービス業就業者だからだという訳ではないと思います。

ローカルのメンバーと一緒に現場で働くことを通じて一番感じていますのは、彼・彼女らにはサービス現場にいながらにして成功していく、すなわちお客様に存在価値を認めてもらえ、差別化になるというロールモデルが見えていないことが、この仕事に対するプライドややる気の不足につながっていることです。

例えば、私がワインをおつぎする前後に意識しているのは、例えばお客様がワインを飲まれるペース。ゆっくりのまれる方には少し低めの温度からワインをご提供しないとワイングラスの中で温度が変わってしまいます。また、食事や会話の進み具合にも気を遣います。ワインはあくまで食事とともに食事の場を引き立てるものであり、「場の空気」をこわすことなく、一方でお待たせすることなく。こうした感覚は、いわゆる「日本的」な気遣いなのかもしれませんが、過去一緒に働いたローカルの仲間の中には、こういた心遣いを具体的に示して実践させることで、それがはっきりした差別化になることに本人たちが気づき、そしてそういう心掛けにお客様が応えて下さる経験を重ねていくことができる仲間もいました。

飲食のサービス現場は慢性的な人手不足のため、ローカルの方みなさんが当てはまる訳ではもちろんありませんが、一方でシンガポールを中心とする当地域でも料理人（シェフ）はいろいろな形で脚光をあび始めています。サービス現場でも、代表格としてのソムリエという立場がもっと注目されることで、関わる人たちの心構えが少しでもポジティブなものになっていくよう、私も今まで以上に取り組もうとしています。

現在はオーナーソムリエとしてワインバーの日々の経営に注力していますが、再びレストランの現場マネージメントも手掛け、こうした質の高いサービスを提供できるモデルを、まずは東南アジアの主要都市で展開できれば、とも考えています。

振り返れば、高校時代は一番の苦手が英語であった私も、海外旅行で見知らぬ街を歩き、そこでいろいろなレストラン巡りをするのが大好きでした。国数でいえば35カ国、都市でいえばその数倍以上を訪れては、現地の食文化とそこで食を存分に楽しんでいる人たちと触れ合うことが、好奇心を満たし、またかき立ててくれます。ワインを通じて、皆様をはじめいろいろな国々の人たちに、心から楽しんで頂ける食の場を提供し続けていきたいと思います。

執筆者氏名

川合 大介（かわい だいすけ）

経歴

1977年、新潟県生まれ。帝国ホテルなどを経て、ほぼ一貫してレストランサービス、マネジメントに携わる。また食文化の見聞を広げるため世界35か国を放浪。2010年に来星しLes Amisにてシェフソムリエを務め、2013年にはLewin Terraceの立ち上げに尽力、その後2015年には自身で経営するワインバーLa Terre (11 Upper Circular Road #01-01, 058409)をスタートさせた。

当地シンガポールのWorld Gourmet Summit にて2013年Best Sommelier of the yearを受賞。また2015年にはポルトガルワインのコンペティションで優勝し、現場で活躍するとともに、マレーシア　ナショナル　ソムリエ　コンペティションや香港でのAsia Wine and Spirits Awards の審査員を勤めるなどアジア各地にて後人育成や業界の発展など幅広く活躍している。

華僑と創る海外進出の第一歩
ジャパンストリートプロジェクト

J Cheer International SDN BHD
Manager
青峰　隆

はじめまして。シンガポールで海外で活躍する日本人を増やす活動をしている青峰です。2012年、シンガポールの隣にあるジョホールバルで事業を始め、今はシンガポールとジョホールバルを行き来しながら活動をしています。

その活動の一つとして2016年1月29日、シンガポールからの国境を越えてすぐにあるシティスクエアというジョホールで最も来場者の多いショッピングモールに、日本の飲食店を7店舗を集めた日本食専門フードコート。ジャパンストリートをオープンしました。一時期、話題になり未来世紀ジパングでも取り上げられましたので聞かれているかたも居るかもしれません。

ジャパンストリートを始めた理由

日本食街は世界にも色々とありますが、多くの場所は第一の都市に補助金などの多額の資金を投入してオープンしているものが殆どで、出来るのは資本力や政府からの補助金を受けられる様な要件を満たしたところだけです。

しかし、海外に挑戦したい企業というのは星の数ほどあります。出店には、立地、人材、宣伝広告、現地の文化を含めて多くの事を知らなければOPENすら難しいという現状があります。日本の市場は確実に縮小をしておりこのままでは沢山のお店が淘汰されてしまいます。世界的に見ても日本の料理というのは、世界に誇れるクオリティを持っており、日本と一緒に沈んでしまうのは大変勿体なく、この現状をなんとか変えられないかと始めたのがジャパンストリートプロジェクトになります。

海外進出の第一歩としてのジャパンストリート

海外に進出するためには沢山のハードルがあり、海外進出に踏み切れない店舗さん。その方たちに出てきてもらうためにはどうしなければいけないのかを考えて、フードコート形式にして運営側がすべてをコントロールし、お店の中だけ各店舗にマネジメントをしてもらう。という形にしました。

立地、人材確保、宣伝、仕入れ、会計。この部分を運営側が請負って、各店舗さんには料理とスタッフ教育に集中してもらう形。そして、一つの場所を7店舗で割ることで初期費用も抑えられる仕組みにしました。

これによりジャパンストリートは外部から一切資金を入れず自分たちの資金だけで創りあげています。日本食レストラン街は数ありますが多くのレストラン街はどこからか支援を受けていると思いますが、ジャパンストリートに限って言えばそれをして

いません。

ジョホールという立地にした理由

売り上げを立て、リスクは低く、今後に繋がる場所と考えた時に最も適していると考えていたからです。

シンガポールで飲食店をオープンしようとすれば億単位での出費が見込まれます。ジョホールと比べると、場所代は5倍、人件費は3倍違う上、競合が激しくリスクが非常に高いため最初の挑戦として新規に出すにはリスクが高いです。海外進出を考えているならば、ローカルの人をターゲットにしていかなければいけないので、そのターゲット層にも注目しました。

マレーシアのジョホールバルは、マレー系5割、中華系4割という割合で経済圏の80%は中華系という事もあり、ターゲットを中華系にする事が出来ると考えました。そして、シンガポールの隣。ジョホールバル最大のショッピングセンター、シティスクエアに来場するうちの30%はシンガポール人であるのでこちらも非常にターゲットとしては強い部分です。

そして、マレーシアはイスラム教の国ですからジャパンストリートで軌道に載せた後は、ハラル認証を取得してこれから伸びていく市場への挑戦も出来ます。つまり、ハラルで無い所でも採算を合わせる事ができながら、ハラル市場へもアプローチが出来、上手く行けばシンガポールへという条件が揃った場所がマレーシアのジョホールバルだった訳です。

約１キロの橋で繋がるジョホールバルとシンガポール

企画段階から始まった未体験プロジェクト

日本でも初めての事であれば簡単には行かない様に、海外で新しい事をするに為には色々な問題がありました。実は、このプロジェクトを始めた時、僕自身は飲食経験が全くありませんでした。

元々、システムエンジニアで国家資格もあるくらいにはITやWebについては強く海外でもそれ一本で会社の売り上げを立てていたのですが、飲食は真逆の世界。営業やプレゼンの経験もない状態でジャパンストリートというプロジェクトを立ち上げる事になり人生初めてのプレゼンや交渉が英語という世界でも稀に見るシチュエーションでした。プロジェクトを始めるとなった時にメンバーと言えるのは３人。うち、１人は別業務で多忙だったので実質２人からのスタート。英語を使えるのは僕１人。そんな状態で創りあげる事になりました。

どこから仕入れるのか？何からはじめて良いのかわからない。

場所はシティスクエアのオーナーとつなげてもらい、直接話をして抑える事が出来ましたが飲食経験ゼロですから場所は決まっても、何から始めたら良いか分かりません。日本と同じような部分は、日本の飲食経験者に尋ねることで解消する事が出来ましたが、日本とマレーシアではルールが違う部分もありますから、そのまま鵜呑みにして進めるわけにもいきません。現地の人と取引はありましたが、飲食関係はノータッチだったので詳しい人も居ません。

どうしようも無くなって僕が取った行動は、「日本食レストランのオーナーに聞きに行く」という事でした。普通に考えれば断られる所ですから、ダメ元でした。結果としては聞きに行った中華系オーナーがとてもよい人で、立ち上げる時に気をつける事など、とても親切に教えてくれる事になり、開店のキッカケを掴むことが出来ました。その時に何人か紹介もしてもらったのですが、これをキッカケに華僑の持つ最も大きな力、ネットワークをこの時から感じるようになります。（正確に書くと中華系マレーシア人は、華人となりますが表現のわかりやすさの為に華僑と表現します。）

紹介が紹介を呼ぶ世界

お店には沢山の設備が必要になります。レジ、内装、スタッフ、華僑の方に紹介してもらった人と出会いその人がまた紹介をしてくれる。数珠つなぎの様に広がる世界に圧倒されました。その甲斐もありジャパンストリートのプロジェクトは、軌道に乗り始め、最後は完成にまで至りました。

店がオープンした時は関係した人が食事をしに来てくれたりと色々と協力もしてくれます。この華僑の姿に僕は海外で事業を成功させるポイントに気づいたのです。

華僑の人たち

海外で活躍する日本の足がかりになる場所を創りたい

海外で活躍する日本人の足がかりになる場所を創りたいという想いで、創り始めたジャパンストリート。海外から見て日本企業は海外進出に非常に苦労をしている様に思います。理由は英語とされていますがそれだけではないなと。華僑の人たちを見てそう思いました。

なぜ華僑は海外でどんどん勢力を拡大していく中日本人は撤退をしていくのだろうか?と考えていた時にふと思い立ったのが、華僑の人はチャイナタウンをその国に創ることで基盤を創りあげて生き残ってきたのではないか?という事です。

実際に華僑の人たちと仕事を進めていく中で、この感覚には確信をもち日本に必要なのはジャパンタウンだという結論に至りました。

このジャパンストリートの先にはジャパンタウンを視ています。飲食だけでなく日本人による現地の人の為の街づくりという形ができた時、日本人はその国に生き残っていく事ができるのだと考えているからです。

これからの活動として

「世界でこういう事をしたい」という事を形にする為に動いてくれるネットワークを広げる事で、日本人の海外進出を強力にバックアップ出来ると考え、僕自身は、シンガポールへ拠点を移して、華僑の人たちと協力しながら、日本人が海外で活躍するための仕組みを創っています。

ジャパンストリートを見てもらいながら、その活動に共感してくれる人が増えていて、実際に海外進出に踏み出された方も沢山います。僕と華僑の共通認識は、Win-Win-Win。自分と相手、そして関わる第三者が、「三方良しでなければ動かない」。お互いを高め合う関係を育てていくことで、海外進出の本当の形が出来上がっていくと僕は考えています。

執筆者氏名

青峰 隆（あおみね りゅう）

経歴

1984年京都生まれ 日本で4年間Web系システムエンジニアとして活動後2012年マレーシアジョホールバルで移住サポート会社を立ち上げCTOに就任。
2015年J Cheer Internationalのマネジメント役としてジャパンストリートを始めとする海外進出のサポートをしながら、Singaporeに法人を設立しDirectorに就任。海外で活躍できる日本人を増やすため、Webやオフラインのネットワークを駆使した華僑と日本人のマッチングビジネスを進めている。

業界プラス１「観光」

日本とシンガポールの観光客動向について

JTB PTE LTD
General Manager Singapore Inbound Office
作田　修

1、はじめに

1989年にシンガポールを離れて以来、25年ぶりにシンガポールに戻ったが、昔の面影は無く、人も街並みも全てが様変わりし、インフラも整い経済発展を続ける理想的な国家が出来上がった様に思える。

観光スポットやIR（統合リゾート施設）や高級ホテルも多数建設され、国際会議を誘致できる立派なコンベンションホールも複数完成し、シンガポール政府観光局の全面的なバックアップも手伝って、観光客の数も年々増加し昨年1年間にシンガポールを訪れた外国人数は15,231,460人で、その内 日本人は789,179人（全体の5.2%）訪星した。日本人の来航者は若干減少したが、外国人客全体では2014年対比で128%増加している。

シンガポール政府は観光を経済成長の手段と位置づけており、量より質を重視し「Quality Tourism」を標榜し、観光客数よりも観光収入を重視。2010年に2つのIRが開業。カジノの売り上げが観光業を牽引。2013年の年間観光収入は1兆9035億円でGDPの約6.7％となった。（日本1.9%、韓国1.5%、フランス3.7%、イギリス3.4%）。他国と比較してもシンガポールの観光産業の貢献度は非常に高い。

2、シンガポールの魅力

シンガポールの好きなところはどこですかと聞かれる事があるが、多様な文化構成、利用しやすい公共交通機関など色々ある中で、私がシンガポールの一番の魅力と考えているのは“シンガポールの緑豊かな街並み”だ。

シンガポールに到着した観光客の多くはビルが林立する街の中心にいながらも、緑を多く目にする事に驚かれる。この緑豊かな街は、偉大なる指導者、リー・クワンユー元首相の、「世界トップレベルの緑に溢れたガーデンシティーを築きあげることで、シンガポールは東南アジアのオアシスとなり、国民にとって住みやすい場所だけでなく、世界中からのビジネス、観光を目的とした人々が集う場所になる」という建国時の強い思いから生まれ、その後、City in the Gardenにまで育て上げたシンガポールの継続した国家政策により実現した。海外からシンガポールに到着し、チャンギ空港から自宅へ向かう道中でほっとした安心感を得られるのもこの街並みがあるからだと実感する。

週末に是非訪ねて欲しいのは、ケント・リッジ・パーク、テロック・ブランガ・ヒル・パークそしてマウント・フェーバー・パークを結ぶサザン・リッジーズの散歩コース。散歩コースの中間にあるフォレスト・ウォークでは、その名の通り森林の中での空中散歩を楽しむ事が出来る。またコースのハイライトとも言えるヘンダーソン・ウェーブズからはシンガポールの街の中心部から、港、そしてその向こうの島々のパノラマビューが広がり、まさに緑豊かな庭園の中の街にいる事を体感できる。

シンガポールの食も侮れない。ガイドブックに話題のお勧めレストランが数々掲載されているが、どこもレベルが高く日本人のテイストにあっている。私が一押しなのは、マリーナベイサンズ内「スカ

イ・オン57」バー＆レストランの1品でフォアグラ入り小籠包。一度お試しあれ。

3、SJ50

2015年シンガポール独立50周年（SG50）が終わり、2016年は日本･シンガポール外交関係樹立50周年（SJ50）という記念すべき年を迎えた。このため、日本大使館が中心となり、シンガポール日本商工会議所や日本人会等が参画するSJ50実行委員会が組織され、SJ50を記念するロゴマークが制定されるとともに、日本とシンガポールの交流促進や相互理解等に資する様々な行事やイベント等について、SJ50記念事業として認定されている。

日本とシンガポールは、1966年4月26日に外交関係を結んで以降、「シンガポール日本商工会議所」が在シンガポール日系企業の活動支援を目的に設立され、日本企業がシンガポール進出への発展に寄与。経済的・政治的に緊密な繋がりを持つようになり、2002年には日本にとって初となる経済連携協力「日本･シンガポール新時代経済連携協定」を結んだ。

現在、シンガポールでは、日系企業の進出が1000社を超え、オーチャードやマリーナ地区には和食店をはじめ、日本でも名の知れた飲食チェーン店が目まぐるしく進出している。また、カルチャーの面でも、日本のアニメ人気からフェスティバルが開催されたり、ファッション施設が丸ごとシンガポールに進出し、シンガポールとの外交は良好だ。

シンガポール政府観光局と日本政府観光局は、2016年1月にシンガポールで観光交流促進に向けた協力覚書を締結。SJ50の記念事業としての認定を受け、シンガポール航空のダブルマイルキャンペーンやシンガポールをお得に楽しめるSJ50キャンペーンなど、様々なプロジェクトが双方で行われる。

すでに始まっているキャンペーンをいくつか紹介すると、ラッフルズホテルのバーでは2月から、日本酒「獺祭（だっさい　蔵元:旭酒造）」とのコラボで作るSJ50記念のカクテル「サクラスリング（Sakura Sling）」が楽しめる。日本とシンガポールの友好と春を感じさせるテイストだ。1915年にラッフルズ・シンガポールで誕生したシンガポールスリングからインスピレーションを得て作られた。

その他、シンガポール国立博物館の入館料がSJ50キャペーン割引きとして半額（常設展）に。マリーナベイ地区の大きな観覧車「シンガポール・フライヤー」の大人チケットが割引になったり、未来型植物園ガーデンズ・バイ・ザ・ベイの日本語オーディオ・ガイドが無料でレンタルできたり。今後、外交樹立50周年（SJ50）を祝う記念事業、イベントや旅行商品、ホテルや現地アトラクションでのお得なキャンペーンなどが続々と打ち出される。メインイベントはなんと言っても10月に開催される「SJ50 まつり」である。詳細は下記の通り。

＜イベント概要＞

●イベント名：SJ50 まつり
●開催期間：2016年10月29日（土）~30日（日）
●開催場所：ニーアンシティ・シビックプラザ（高島屋SC前の屋外広場）
●主催：SJ50 Matsuri ステアリングコミッティ（在シンガポール日本国大使館、シンガポール日本人会、シンガポール日本商工会議所、日本貿易振興機構シンガポール事務所、日本政府観光局シンガポール事務所、自治体国際化協会シンガポール事務所、科学技術振興機構シンガポール事務所、星日文化協会）
●イベント内容：展示即売会、ステージイベント
●出展、出演対象：日本製品、サービス、ポップカルチャーなど、Made In Japanを取り扱う在シンガポール日系企業、地方自治体、その他団体

4、訪日シンガポール人（外国人）の動向

2015年の訪日外国人数は1974万人で惜しくも2000万人の大台超えこそ逃したが「観光立国ニッポン」への視界は良好に見える。シンガポール人も昨年は合計308,783名が来日し前年比135%の伸び率となった。シンガポール人のリピート率は高く約7割がリピーターで、10回以上日本を訪れた人は全体の15%に及ぶ。いかに日本が好かれているかが分かる。

日本の観光素材としては、雪、桜、紅葉などの四季折々の自然景観、ヘルシーで美味しい日本食・菓子、日本文化（ファッション、アニメ・コスプレ、伝統芸能等）、高品質で品揃えが豊富なショッピング（医薬品、化粧品、家電）、洗練されたサービス・おもてなしが上げられる。その他にも宿泊先の旅館やホテル、新幹線やフェリーといった乗り物も魅力的でディズニーランドやユニバーサルスタジオなどの総合レジャー施設も人気が高い。

外国人訪問先都道府県ランキングでは、1位 東京都 2位 千葉県 3位 大阪府 4位 京府都 5位 福岡県 6位 神奈川県 7位 愛知県 8位 北海道 9位 兵庫県 10位 大分県となっている。2016年3月26日に北海道新幹線［新青森-新函館北斗間］が開業した事で更に北海道人気が上がると予想出来る。

満足した食事では、寿司・刺身、天婦羅、ラーメン、そば・うどん、肉料理、魚料理、菓子類が上げられるが、シンガポールの現在の物価から比較すると日本国内の和食の方が価格が安く、しかも新鮮で種類も豊富にある事が、ローカルの満足度を上げている事に繋がる。

一方、課題点としては、中国、韓国と比較してパッケージ等の旅行価格が高額。訪日未経験者における物価高のイメージ。台湾・香港などと比較して遠距離にあるという地理的ハンディキャップ。ピークシーズン時における観光バスやガイド・都市部ホテルの不足が深刻。中国語や英語が通じず言語障壁があるというイメージから心理的なハードルが高い。放射能汚染、地震その他天災に対する不安。韓国や台湾など近隣アジア諸国政府観光局による積極的なプロモーション展開に押されている点が上げられる。

好機として、2014年3月から羽田空港発着枠の拡大。免税制度の拡充（2014年10月）。日本ファン層の増加（2016年1月現在、日本政府観光局シンガポール事務所が管理しているFacebook日本ファンサイトhttps://www.facebook.com/visitjapan2010に77万人が登録。）空前の日本食ブーム、日本のファッション等日本文化の浸透、人気の定着。宿泊都道府県は東京、大阪、北海道で約70%を占めており、新たなディスティネーション開拓の余地がある。

日本の各自治体は、外国人誘致目的でシンガポールを訪れ、現地旅行会社を集めて商談会を行ったり、ご当地自慢の食材や商品を持参しデパートでフードフェアを開催しながら自己PR活動を行っているほか、NATASフェアやトラベル・レボリューションに参加して外国人観光客獲得に過熱している。

毎年定期的に行われている旅行博覧会でも日本行きのツアーを販売する旅行会社の数は目に見えて多くなっている。

5、終わりに

日本政府は3月30日、外国人旅行客の拡大策を考える「明日の日本を支える観光ビジョン構想会議」（議長・安倍晋三首相）で、訪日外国人数を2020年に現在の2倍の4000万人、30年には同3倍の6000万人に増やす新しい目標を決めたが、2020年には東京オリンピック・パラリンピックをひかえており決して不可能な数字ではないと思う。成長戦略の柱として訪日客増加による旅行観光業の役割は非常に重大である。

〈参考文献〉

National Parks https://www.nparks.gov.sg
STB http://www.travelvision.jp/news
SJ50 http://www.sj50.jp/
http://www.sankei.com/politics/news
http://wwwtb.mlit.go.jp/

執筆者氏名
作田 修（さくた おさむ）
経歴
経歴 1963年東京生まれ。1987年青山学院大学卒業、JTB香港支店、同クアラルンプール支店勤務後、2016年1月より現職。趣味はグルメとスポーツ観戦

2015年度寄付先団体・奨学生紹介　連載第15回

National University of Singapore Lee Kuan Yew School of Public Policy - Japan Study Trip 2016

月報1月号にて既報の通り、シンガポール日本商工会議所基金「2015年度募金」からは、12の団体と2名の学生への寄付金授与が決まりました。当連載にて順次各寄付先に触れていきますが、今回は拡大版として、シンガポール国立大学のリー・クアンユー公共政策大学院に加え、現在JCCI基金から奨学金を得て就学中である留学生2名（2016年7月帰国予定）にもインタビューを行いました。

National University of Singapore Lee Kuan Yew School of Public Policy（NUS LKYSPP）

2004 年に設立されたシンガポール国立大学の大学院。公共政策を学び、アジアでの教育や研究を推進し、リーダーシップを持った人材の育成を目的としている。

What is LKYSPP?

The Lee Kuan Yew School of Public Policy, or LKYSPP, is an autonomous postgraduate school of the National University of Singapore. It was established in 2004 with the mission of educating and training the next generation of Asian policymakers and leaders. Its objectives are to raise the standards of governance throughout the region, improve the lives of the region's people and, in so doing, contribute to the transformation of Asia. Throughout Asia, the demand for a first-rate public policy education is growing. Currently, the School offers one PhD and three Masters programmes: Master in Public Policy; Master in Public Administration; Master in Public Management; and Doctor of Philosophy. They also stand out for their emphasis on the public policy experiences of Asian countries and the critical challenges facing them. Students are coming from all over the world, mainly from Asia.

What is Japan Study Trip?

Japan Study Trip project has been organised by a voluntary student group of LKYSPP – Japan Study Trip Committee – every year. This project started 6 years ago, in 2011. At that time, a Japanese student hit upon an idea to bring his classmates to Japan for study purpose. He was worried that Japan's presence in the academic sphere appeared to be marginalised by emerging powers Asia, therefore planned the project to share Japanese knowledge and experiences of public and private sectors with other countries and to demonstrate unique and attractive traditions and cultures of Japan. LKYSPP also approved his plan and thus the first round of Japan Study Trip was carried out. Since then, for successive six years, Japan Study Trip Committee has been organising this

study trip annually. Now, Japan Study Trip has become one of the most popular and exciting events of LKYSPP with high reputation not only among students but also among many stakeholders in Japan.

There are some reasons why we could have continued Japan Study Trip for long, but, among other things, it is mostly because of enormous support from sponsors and collaborators such as JCCI Singapore, the Japan Foundation, the University of Tokyo and a members of the Diet in Japan. Without assistance of these supporters, it was impossible for us to develop the initial trip to such a big event of LKYSPP that we have now.

Achievements of the past Japan Study Trips

Japan Study Trip has provided various opportunities to LKYSPP students to consider latest policy issues surrounding Japan and Asia. Through lectures and discussions with stakeholders being involved in the public policy in Japan such as central and local governments and private companies, the trip has promoted mutual understandings and international exchanges of individuals and organizations in Asian countries and Japan. In this way, prospective LKYSPP students cultivated the sense of policy making in the real world and turned their eyes onto relationships between Japan and their home countries. Moreover, as some of the students seek to find a job or to start a new business, encounters with Japanese business persons in this trip can become a foothold for them to launch collaborative works in the future. Indeed, some of the trip participants are looking for job opportunities in Japan. Hence, we believe that our Japan Study Trip contributes to training young Asian leaders and enhances vital interaction between Japan and other countries in terms of both public and private sector developments.

Main topics of Japan Study Trip 2016

In Japan Study Trip 2016, we mainly focused on three topics: 1) Japan and Asian security, 2) Industry, science and technology policy, and 3) Education policy. With these three main topics, we provided lectures and opportunities for exchange of opinions with a variety of stakeholders playing pivotal roles in public policy arena to LKYSPP students.

The first topic is national security of Japan and Asia. Currently, the security policy of Japan stands at a critical stage. After the World War II, any military actions against any country has been denied under Article 9 of the Constitution. On the other hand, the need for active pacifism in the exercise of the right of collective self-defense has been discussing in changing the international situation. The international cooperation indispensable and mutual understanding between Japan and Asian countries are becoming more and more important to bring peace in the whole of Asia. To deepen the study for the discussion of security and peace, we visited Hiroshima in Japan that is one of the only two places in the world that experienced an atomic bomb attack (as G7 foreign ministers recently visited the place). We all reconfirmed importance of peace, and held meetings with experts on Japan's security policy and foreign policy.

The second topic is to learn about Japanese industry, science, and technology policies. Many Asian countries such as Singapore has been conducting a remarkable economic development since the late 20 century while the economic situation in Japan has been struggling with the lost post-bubble period of 20 years since 1990s. However, Japan remains to be a top-tier advanced country regarding science and technology. Therefore, this trip provided opportunities to learn the Japan's advanced technologies, such as we can find in practice of Honda Motor Co., Ltd., Cyberdyne, and the central government. Furthermore, in Hiroshima, we also visited a front-runner brash factory that contributes to the regional economy with its global strategy and exceptional manufacturing skills.

The third topic is education policy that many LKYSPP students from developing countries in Southeast Asia are highly interested in. As Japan has been maintaining a high level of the nationwide compulsory education system, this would be very beneficial for all the participants to learn education policy of Japan. The trip participants visited the Ministry of Education to have discussions on education administration and Japan's educational policy for consideration at a deeper level. Furthermore, we provided an opportunity to study the latest and unique school system of Tsukuba City, Ibaraki Prefecture. Tsukuba City has introduced an educational consistency from primary through early secondary levels into all the public schools since 2012. We visited Kasuga-Gakuen (a public compulsory education school) and observed the cutting-edge public education model of the municipality.

Attainments from Japan Study Trip 2016

For this year's Japan Study Trip project, we had more than 70 applications from LKYSPP students, from which we selected 36 students under certain criteria. We accompanied the 36 students from 22 countries from all over the world to Japan. Some of them have been to Japan for several times, while others had never been to Japan before. But, no matter whether he/she had been to

Japan or not, this year's Japan Study Trip was astonishing experience to them.

During the trip (19th to 28th February 2016), we first went to Hiroshima prefecture, and discovered beauty of local places and history of Japan. Hiroshima Peace Memorial and Itsukushima Shrine impressed participants a lot. Secondly, we went to Kyoto to find culture and tradition of Japan. For almost all of the participants, Kyoto was a dream place to visit. Thirdly, we spent 5 days in Tokyo (including site visits to Saitama and Ibaraki prefectures), having many lectures and discussions with politicians, government officers and private companies. We also had the a joint conference at GraSPP (Public Policy School of the University of Tokyo), and one-day group field research. Throughout the trip, we promoted mutual understandings and exchanges of individuals and organizations in Asian countries and Japan from various perspectives including Japan's political economy, culture, and history. These opportunities were also beneficial to build networks between prospective Asian future leaders, and Japanese politicians, business persons and public officers. The networks incubated in this study trip will be an indispensable asset for both Japan and the other Asian counties in the future.

Participants really enjoyed every content of the trip. Although our itinerary was quite intense and hectic because we packed lots of events in only 9 days, they found this trip is really fruitful to discover Japan and its allures. Even the organising committee members – who are mostly Japanese – were surprised to hear and see how much participants indulged in exploring Japan, in addition to studying public policy implementation and administration system of Japan.

Overall, Japan Study Trip 2016 was very successful and will continue to be a memorable experience not only for participants but also for Japanese people who joined our sessions.

Our highest Gratitude to JCCI Singapore and its members

We all really appreciate JCCI Singapore for giving us fund support to Japan Study Trip 2016. We could not achieve our project without your huge contribution. Thank you very much and we wish JCCI Singapore many more successful years. We all pledge here that we fully utilise this precious experience and contribute to developments of Japan, Asia and the world.

a) Photo on the first page: visit to Kasuga Gakuen

b) First photo on this page: Policy Conference at University of Tokyo

c) Second photo on this page: Kimono experience in Kyoto

MS. NG SUE ANN, JOANNA

早稲田大学 国際教養学部
日本概論コース 奨学生
（September 2015- July 2016）

1 Among all the courses that you have taken at the university in Japan, which is/are your favourite course(s) and why do you like it/them?

My favourite course that I have taken in Waseda is Environmental Politics. Every week we take a lecture conducted by my professor and a webcam lecture conducted by professors around the world. The breadth and depth of the topics introduced in class exposed me to a wide range of environmental issues. My favourite issue is Pacific Bluefin Tuna Fishing and how businesses need to work with governments to protect endangered tuna stocks.

2 In what ways has this scholarship program helped to better your understanding about Japan, its culture and people?

At first, I thought that Tokyo was a cosmopolitan city and everyone would speak English. (Laughs) But this was not the case and I had to brush up my Japanese. In November, I took part in a Speech Contest where I had to write and edit a Japanese speech with a group of Japanese students from Waseda International Club. The contest was a good experience for me to learn about the Japanese group culture and team work spirit.

3 With this scholarship experience in Japan, how you would want to bridge yourself between Singapore & Japan in future?

When I return to Singapore, I plan to take part in more activities and get to know more Japanese students studying in NUS! I am also learning more about various migration issues in an advanced seminar that I am taking in Waseda with the Year 3 and Year 4 local students. I am also volunteering at a local NPO and helping out to connect migrant children with the local Japanese community. I would like to learn about various migration issues that both Singapore and Japan are facing as developed nations and see how both countries can learn from each other.

4 With this scholarship program coming to an end in July, what do you think that you would miss most about Japan upon returning to Singapore?

The thing that I would miss most about Japan is a sense of order. I learnt that there are some unwritten norms or written rules that some would consider "mendokusai" to follow. But these norms are followed so as to be considerate towards people who are living in the same environment. For example, when I was trying to be the first in line at one of the most remote side gates of the school for course registration, the guard actually turned up exactly at the stated time. In Singapore, the more remote gates would probably not be opened at the exact stated time. The reliability of services is something that I would miss upon returning to Singapore.

Photos above: Working with WIC (Waseda International Club) for Speech Contest

MR. TAY WEI DE, ALVAN

立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋学部 奨学生
（September 2015- July 2016）

1 Among all the courses that you have taken at the university in Japan, which is/are your favourite course(s) and why do you like it/them?

Being able to study at Ritsumeikan Asia Pacific University has been a wonderful opportunity for me and I have certainly learnt a lot from all of my courses here. Amongst them, one of my favourite classes would definitely have to be my Japanese class. Personally, I have always felt that learning a language is very important to understanding the culture behind it, which was one of my main objectives for coming to Japan – to understand more about the Japanese culture. Through improving my Japanese language ability, I found that I was not only able to communicate with Japanese people better, but also understand things better from their perspectives.

2 In what ways has this scholarship program helped to better your understanding about Japan, its culture and people?

I am immensely thankful for the opportunity granted by the JCCI scholarship to be able to study and live in Beppu. Being in a fairly small town and having to step out of my comfort zone by communicating in Japanese daily has helped a lot in understanding things from the Japanese community's perspectives. Moreover, with this scholarship programme, I was encouraged to set objectives for myself and to reflect on my experiences in Japan. Through this, I was able to fully internalise and consolidate all that I have learnt in my stay here.

3 With this scholarship experience in Japan, how you would want to bridge yourself between Singapore & Japan in future?

I am looking forward to leverage on my experiences in Japan to contribute to bilateral relations between Singapore and Japan. In the short term, I would love to share more about the Japanese culture, society, and other things that I have learnt to promote Japan to youths in Singapore. In the long run, as a finance student, I will actively seek to bridge both countries' economies either by helping Japanese start-ups in Singapore or vice versa. Furthermore, I will also look for opportunities where I can assist Japanese companies with strengthening their market presence.

4 With this scholarship program coming to an end in July, what do you think that you would miss most about Japan upon returning to Singapore?

It feels like only yesterday that I just arrived in Japan but, indeed, in three months' time, I will be leaving Japan with a heavy heart. During my stay here, there have been many things that I have come to learn and love about Japanese culture. In particular, I will miss the new friends that I made, the delicious food, and the four seasons. But above all, the one thing I will miss most is how welcome I felt in Japan and the warmth of the Japanese people that greeted me everyday. For me, this speaks volumes about the kindness of Japanese people and will always remain etched in my memory.

MR. LIM KIAN FONG

シンガポール日本商工会議所基金による奨学生派遣事業は、会員の皆様の多大なるご理解とご支援に支えられながら、2015年度で20年目を迎えました。これを記念し、4月号より9回に渡り、過去の奨学生達に、現状況や日本での留学経験が人生に及ぼした影響等について語ってもらいます。第2回目は2009年度、早稲田大学の奨学生に選ばれた Mr. Lim Kian Fongの寄稿となります。

Mr. Lim Kian Fong

現在、日本にある不動産投資 PAG でインベストメント・マネジメントに取り込んでいる。

Seeds

My first connections with Japan during my growing up years was one that was heavily influenced by Japanese pop culture in the 90s where everyone around me was reading mangas such as Dragonball and Slamdunk, and watching Japanese dramas. I had the additional influence from my elder brother of J-Rock bands and we spent time recording songs from bands like X-Japan, Glay, and Luna Sea into our now unused Mini-discmans. I remember in those days under the influence of Japanese dramas, I once had a dream of entering Tokyo University after high school and live in a shared apartment with a few friends having the view of Tokyo Tower, which when I look back at the opportunity given to me to study in Waseda University for a year, it was a dream come true.

Due to this influence, I chose to study Japanese as a 3rd language when I was given the chance to in secondary school at a government run language center. It was a rare opportunity and a significant time commitment as I had to travel twice a week after school to the language center, which was an hour away from school, on top of basketball training (yes you guessed it, influence from Slamdunk!) that can go up to 3 times a week during competition season. Many who took Japanese and whose school is some distance from the language center dropped out halfway due to the heavy time commitment but somehow I continued for the entire 4 years, partly thanks to my mum who chauffeured me between school and the language center, and partly thanks to a friend who stuck on to it with me. Interestingly, this close friend of mine also got married to a Japanese wife. I did not feel that it was tough for the 4 years, and was not anchored by a particular hobby that is connected to Japanese culture. I simply felt an interest for the language and culture.

When I was 15 years old, through the language center, I spent 2 weeks staying in a Japanese host family in Singapore and followed my host who was a 14 year old Japanese boy to classes in the Japanese School in Singapore. Through those 2 weeks I learnt of many small little things in a Japanese family and school. I still remember the fascination I had when there was always a flask of chilled tea in the fridge of the Japanese family that they make the boy bring to school in a vacuum flask, of which I only got to know that it was wheat tea ("mugicha") when I started living in Japan. For the first time in my life, I also got to appreciate the rule that Japanese schools have to separate indoor and outdoor sports shoes worn, and that immediately connected with the scenes I read from Slamdunk where basketball players ritualistically mop their indoor gym floors with large rectangular mops. I have since lost contact with my host family and that has been one of the lingering feelings of regret I have always had.

I once had a dream…. which when I look back at the opportunity given to me to study in Waseda University for a year, it was a dream come true.

When I was 13, I travelled to Japan for the first time with my elder brother who was 17 and a close friend who was 15 at that time. 3 boys came to Tokyo with no adult supervision and we had so much fun. Its difficult to describe but even the unique smell of plastic that Japan uses for the pre-made bath and toilet units when we first landed at Narita Airport felt so different from what we had in Singapore. We would do the usual tourist spots along the Yamanote Line in the day and at night would run to the nearest convenience store near our hostel in Shin Okubo because they had manga that wasn't sealed and so we could browse for free for hours!

A forgotten dream rekindled

The dream remained a dream and I forgot about Japan as I continued my education the typical Singaporean way from Junior College to a local university. Basketball took

up a lot of my time in Junior College and so I did not continue Japanese classes then. During the time in Singapore Management University, when I was considering where to go for one semester as part of the exchange program, I was tied between Japan and Europe. Japan because I have always wanted to experience living in Japan for a while, but Europe proved to be too attractive a destination because of the travelling opportunities to many countries within a single region. In the end I went to Copenhagen for 6 months and travelled to many destinations in Europe but Japan was always at the back of my mind and there was a slight lingering feeling that I missed out on Japan.

In the final year of university, it was job hunting season and everyone was trying hard to land an offer before graduation. There was a job offer that I was quite interested in, of which I failed the final round of interview and I was very disappointed and it was a little of a low point. At around the same time, I saw an email asking for applicants for a one year fully paid scholarship to study in Japan sponsored by the Japanese Chambers of Commerce and Industry in Singapore (JCCI). I knew the chances of getting it was much smaller than other job offers as typically only 1 student gets chosen each year out of quite a number of applicants. However I knew this was something I wanted. Despite this equating to a delay in the start of my career, plus guys are already 2 years later than their lady counterparts due to national service, in the greater scheme of things, starting a year late in exchange for an entirely difference experience of living in Japan for a year was a no brainer for me. And so I prepared hard for the interview. By then, its been 10 years since I stopped Japanese classes so I probably forgot half of what I learnt, but I got a Japanese friend to write a simple 2 to 3 minute speech in formal language ("keigo") and I must have memorized and practiced it over 200 times. On the actual day of the interview, I was still trembling from the fear that I would forget my speech but eventually I knew it went well when I was offered the scholarship. It was an indescribable feeling. For a moment, I felt like I was the "chosen one" out of the many applicants and this event proved to have changed my life.

…off I went to experience my new life in Tokyo. I was excited and looked forward to the new experiences but yet there was a certain sense of familiarity…

New yet familiar experience

And off I went to experience my new life in Tokyo. I was excited and looked forward to the new experiences but yet there was a certain sense of familiarity in the sights, sounds of the trains, smell of gyudon in Yoshinoya etc. I was living in Shin Urayasu in the Japan Airlines dormitory and the area was a 1.5 hour commute to school at Waseda University. The first week was very simple as it was before school started and I was getting to know the area. I even borrowed a bicycle from the dormitory and cycled to Disneyland which was a train stop away! There was a canteen in the dorm that offered cheap food, and by then after experiencing Europe on a shoestring, I was well accustomed to the ways a poor student could save money. Very soon I got a bicycle from a recycling workshop for 5,500 yen and that allowed me to cycle everyday for 20 minutes to a further station but which reduced my overall commute by half. At school, I was the old bird, since most of my classmates were undergraduates. I was a 25 year old 'uncle' mixing around 19 and 20 year olds. Perhaps due to my age or the upbringing through the Singaporean education system or the pedagogy of SMU, I felt the modules were generally light and since classes and papers were in English, I felt I had an inherent advantage over most students. It was almost like you will never fail a module as long as you write decent English.

Snowboarding trip with school mates in Waseda

Part time job that changed my life

Towards the middle of my year in Waseda, I chanced upon a part time job working for an apparel company selling clothes in Ginza. I immediately took it up as I thought my experience in Tokyo would not be complete without working part time somewhere. Besides, it provided beer money. At the part time work place, I met a girl and the rest is history.

I knew she was the one and I promised her that I would stay in Japan. The problem was by that time I had 2 months left on my student visa and do not have a job to stay on in Japan!

Japanese costumes at the wedding march-in in Singapore which was interesting for the invitees

Back against the wall

My time in the dormitory was up and I had to leave but haven't found a job. I had to temporarily stay at a friend's place for a month while the friend was out of Tokyo while I went for interviews. It was difficult to get a job as by then the hiring cycle for new graduates for most big Japanese companies was over, plus the fact that my level of Japanese was not great. There was also the issue of a job visa and it was a little bit of a chicken and egg. One of the companies I interviewed for asked if I had a working visa. When I went to the immigration office to apply for the working visa, they asked if I had a company who was going to sponsor the visa. I went back to the company and was told as a 'company policy', they do not sponsor visas for fresh graduate hires. What I learnt during this process though was when you had your back against the wall and you want something bad enough, you will make it happen. Eventually I did get a job offer from a company who was willing to sponsor the working visa and I realized I pulled off quite a feat in a country whose immigration policy on foreign workers was so limited. I always like to illustrate this point by saying there are roughly the same number of foreigners in Singapore with a population of 5.5 million and Japan with a population of 120 million.

And… I have not looked back since…. My year in Waseda changed my life.

Today

And… I have not looked back since. Today I have been in Japan for 7 years working for 6 years for 2 companies. I am happily married to a lovely Japanese wife. My year in Waseda changed my life. My connection to Japan at an early age changed my life. I feel a unique dual identity as a Singaporean and as someone who has a deep connection with Japan. My children will be half Japanese. I have relatives on my wife's side in Fukushima and I have the privilege of sitting down with them listening to the stories about their lives after the major earthquake and nuclear aftermath. I do the 'Japanese way' of visiting my wife's family during new year, eat traditional new year food like "osechiryori", head to the temple for "Hatsumoude" on the first day of the new year and ring the bell. If and when we move to Singapore, my children will visit their grandparents during summer or winter and enjoy the seasonality in Japan that Singapore lacks, cherry blossoms in Spring, skiing in winter etc. And while I couldn't say that the year in Japan had a deep and profound influence on the career path I chose, the year in Japan changed my life.

The author is Lim Kian Fong and he was awarded the JCCI scholarship for a 1 year program to Waseda University in 2009. He graduated from Singapore Management University in the same year and started his career in Tokyo in 2010 after completing the 1 year program, and is currently working in PAG Investment Management specializing in real estate investments.

いかがでしたでしょうか。次回は1998年度、武蔵野美術大学の奨学生に選ばれたMr Chow Chee Yong からの寄稿をご紹介いたします。

日本シンガポール協会便り

日本シンガポール協会便り　No.38

日本シンガポール協会よりお知らせです

協会のホームページをご覧ください！

ホームページ委員会で編集に1年ほど時間をかけ、協会の新しいホームページを昨年の6月10日に発足させました。「分かりやすい、親しみやすい」をコンセプトに、協会の活動全般を網羅しています。加えて、「シンガポール情報」のメニューを新しく設け、会員の皆様が再度シンガポールに行かれる時のために、また、シンガポールに興味ある方へのお役立ち情報として、現地でのゴルフや、現地や日本でのシンガポール料理の食べどころ情報も満載しております。

更に「シンガポールでがんばっています」や「会員の見たシンガポール」など会員の皆様の個人の情報の投稿欄も新設、これからシリーズでお届けします。シンガポール在住の皆様のご投稿をお待ちしています。

ますます充実したホームページとなりますよう、ご意見、ご感想、ご提案をお気軽にお寄せください。

一般社団法人 日本シンガポール協会　http://www.singaaso.or.jp

はい、こちらは「日本シンガポール協会」です！

「日本シンガポール協会」は1971年の設立以来、「シンガポール日本商工会議所（JCCI）」とも密接に連携し、日本とシンガポールとの経済協力、文化交流を深めるための活動をボランティア・ベースで行っています。シンガポールとの関係、交流を深めるため、ご帰国されましたら、あるいは今から協会の活動にご参加されませんか。ご入会を心からお待ちしています。連絡先は下記のとおりです。(2013年1月に、事務所は港区赤坂より港区芝に引っ越しました)

一般社団法人　日本シンガポール協会
〒108-0014 東京都港区芝4-7-6 芝ビルディング308号
電話：03-6435-3600　FAX：03-6435-3602
E-mail：singaaso@singaaso.or.jp
ホームページ：HYPERLINK "http://www.singaaso.or.jp/"

第549回理事会　議事録

日　時：2016年4月12日（火）12：30～14：00
場　所：日本人会　2階　ボールルーム
出席者：岡田会頭、入江、森崎、上田、鈴木、高橋副会頭、小西、松浦、加藤、赤松、牛頭運営担当理事、冨田、福田、山下、太田、林、西田（浩）、筑本、佐々木、村上、東、水上、白川、橋田、高橋（幸）、三石、土光、稲垣、小澤理事、石井、今井監事、堤、利光、長谷部参与、長尾事務局長
計35名

岡田会頭が議長となって開会した。

議　事：

（1）理事の帰国・異動等に伴う後任理事の選任について

岡田会頭より、関、今枝副会頭、藤田、佐々木、出口、萩原、髙橋、大野各理事が理事職を辞任し、それぞれ栃折卓彦氏（みずほ銀行）、入江浩氏（三井住友銀行）、牛頭豊氏（清水建設）、福田祐士氏（伊藤忠シンガポール）、西田浩之氏（丸紅アセアン）、佐々木信二氏（三菱電機アジア）、高沢聡氏（住友化学アジアパシフィック）、高橋幸嗣氏（テネットソンポインシュアランス）を後任副会頭、後任理事として選任することが提案され、理事に諮られたところ異議なく承認された。

（2）2016年　活動方針について

岡田会頭より、先の総会で表明のあった通り、2016年度の会議所活動を「多様化する企業ニーズに対応する事業活動の追及」を基本方針としてすすめていく旨説明があった。重点的取り組みとして、①幅広く有益な情報の提供、②会員ニーズに沿った交流事業の実施、③長期的視点から見た日本企業のビジネス環境の改善、④日星50周年を通じた両国交流の促進とシンガポールへの社会貢献、の4つが掲げられた。活動方針について理事に諮られたところ異議なく承認された。

（3）2016年理事の担当職務分担（案）について

長尾事務局長より、正副会頭、運営担当理事、各委員会について説明があった。その上で各理事の担当職務について提案され、運営担当理事会メンバー案、各委員会委員長案に関しまず諮られたところ異議なく承認された。その他の分担について異存のある場合は次回理事会までに事務局に連絡することとなった。

（4）2016年監事・顧問・参与の委嘱について

岡田会頭より、2016年度の監事として、昨年に続き石井計多氏（シンガポール味の素社）、今井秀和氏（日経グループアジア）、参与として堤公使（日本国大使館）、利光一等書記官（日本国大使館）、長谷部所長（ジェトロシンガポール）に委嘱したい旨の提案があり、理事に諮られたところ異議なく承認された。

（5）プレーンパッケージ規制に関する要望書

長尾事務局長より、現在シンガポールが導入を検討しているタバコ製品への『プレーンパッケージ規制』について、同規制が商品の出所表示や品質保証といった商標の基本的機能を阻害し、また、同様の規制がアルコールや食品、飲料など他産業へ拡大されるきっかけとなることから、その導入に慎重な検討を要請する要望書を提出する旨、説明があった。福田理事からは、アメリカ商工会議所などの要望内容がどのようになっているか質問があり、長尾事務局長から、アメリカ商工会議所、欧州商工会議所などの他国商工会議所はタバコ規制そのものに反対する論調もある中、JCCIではタバコ規制には理解を示しながらも、商

標権の保護の観点から規制導入に慎重な対応を求める姿勢である旨、回答があった。改めて理事に諮られたところ、異議なく承認された。

（6）日星50周年記念事業「スポーツカンファレンス」への後援名義付与について

長尾事務局長より、5月2日に日星50周年事業として開催される「スポーツカンファレンス」への後援名義付与について要請があった旨説明があった。同事業では両国のスポーツの発展や人間教育、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを盛り上げるきっかけとして開催されるもので、グレース・フー文化コミュニティ青年省大臣やシンガポールスポーツ評議会のリム・テックインCEOが参加する。

後援名義付与について理事に腹かられたところ、異議なく承認された。

（7）入退会について

＜資料5＞に基づき、長尾事務局長より、5法人会員、1個人会員の入会申請、2法人会員の退会申請があった旨説明され、諮られたところ異議なく承認された。これにより会員数は、法人会員750社、個人会員104名、計854会員となった。

3. 報告事項

（1）会頭報告、最近および今後の主要行事・会合について

岡田会頭から以下の事業、会合等の報告があった。

3月11日には震災5周年レセプション

3月15日には年次総会

3月18日には竹内大使の送別会

5月10日には篠田大使の歓迎会が予定されている。

（2）大使館ならびにJETROからの報告・連絡事項

日本大使館の堤公使より以下報告があった。

・新旧大使の歓送迎会の開催について謝意を述べる。

・在外選挙人登録について、7名以上の登録希望者がいれば当該企業まで大使館から出張サービスを派遣する。昨年は17団体、230名が登録した。

・5月27－28日には伊勢志摩サミット、これに関連し4月10日－9月25日までは様々なイベントが開催されるのに合わせ、日本国内ではテロ防止のため警備強化に努めている。海外のテロも頻発しており、もし3カ月以上外国滞在を行う場合、在外届を出してほしい。３カ月未満であれば「たびレジ」を利用してほしい。

・日星50周年に関連し、10月29日－30日に「SJ50　MATSURI」を開催する。

JETROの長谷部所長から以下の報告があった。

・4月にはFood & Hotel Asia（東南アジア最大の食品見本市）が開催され、日本からも74社が参加する予定。

（3）その他連絡

・長尾事務局長より、賃金調査、FJCCIA要望アンケートを実施していることなどの説明があった。

以　　上

＜2016年5月入会会員一覧＞

会　員　名	格付	備　考
TOTO ASIA OCEANIA PTE LTD ［第２工業部会］	A （法人）	Sales of sanitary ware 現地法人（100%日本出資） 設立登記：2008年1月 従業員数：64（派遣邦人15）
K & L CREATIVE ASIA PTE LTD ［観光・流通・サービス部会］	C （法人）	アジア域内及びグローバルでの広告企画立案・各種マーケテイング コミュニケーションに必要な映像、広告クレイティブ、印刷物、販促物の企画制作 現地法人（100%日本出資） 設立登記：2015年12月 従業員数：4（派遣邦人3）

最近の推移：
（’１３年１０月）７８９会員、（’１３年１１月）７９５会員、（’１３年１２月）８０２会員、（’１４年1月）８０２会員、（’１４年2月）８０１会員、
（’１４年3月）８０１会員、（’１４年4月）８０１会員、（’１４年5月）８０４会員、（’１４年6月）８０４会員、（’１４年7月）７９９会員、
（’１４年9月）８０２会員、（’１４年１０月）８０５会員、（’１４年１１月）８０６会員、（’１４年１２月）８１３会員、（’１５年1月）８１３会員、
（’１５年2月）８１５会員、（’１５年3月）８２２会員、（’１５年4月）８２９会員、（’１５年5月）８３２会員、（’１５年6月）８３３会員、
（’１５年7月）８３５会員、（’１５年9月）８４０会員、（’１５年１０月）８４６会員、（’１５年１１月）８４８会員、（’１５年１２月）８５４会員
（’１６年1月）８４２会員、（’１６年1月）８５０会員、（’１６年2月）８５０会員、（’１６年3月）８５０会員（’１６年4月）８５４会員

5月 JCCIイベント写真

5月5日　第2工業部会　懇親ゴルフ

5月10日　篠田大使歓迎会

篠田 研次大使

5月17日　第3工業部会講演会
「テクノロジー視点からの電機電子業界に関する最新動向及び取り組み事例」

シンガポール日本商工会議所
事務局便り

≪　2016年5月活動報告　≫

第2工業部会　懇親ゴルフ

去る5月5日（木）、Singapore Island Country Club (Island Course)にて第二工業部会の懇親ゴルフならびに懇親会を開催し、14名（うち初参加5名）の方にご参加いただきました。当日は蒸し暑い気候の中スタートし、途中雨による休止も2時間ほどありました。日没後の見通しの悪い中でも皆様精力的にプレーされ、全員が最後のホールまで完了することができました。懇親会では、新旧の参加者が交流を深めるとともに、悪条件の下優勝を勝ち取ったKIBUN Foods Singaporeの芝崎様に、惜しみない拍手が送られました。

第3工業部会講演会　「テクノロジー視点からの電機/電子業界に関する最新動向及び取り組み事例」

5月17日（火）には、第3工業部会講演会「テクノロジー視点からの電機・電子業界に関する最新動向、及び、取り組み事例」を開催、IBM様を講師にお迎えし、テクノロジー視点からの電機・電子業界に関する最新動向や、各社の取り組み事例をご紹介頂きました。第一部では、IoT（Internet of Things)、アナリティクス（分析)、コグニティブ（コンピュータが人間の脳のように考え対応する）への理解を促すと共に、エレクトロニクス業界だけではなく、他の業界も巻き込んだ変革の可能性や、その価値に関してのご講話を頂きました。

≪　2016年6月　行事予定　≫　※予定は事情により変更・追加されることがございます。

開催日	開催区分	イベント名	時間・場所
6月3日（金）	委員会	6月広報委員会	12：30 －14：00 日本人会
6月7日（火）	委員会	6月度会員講演会 「『アジアで勝つため』に 日系企業が取り組むべき人事施策」	15：00－17：00 日本人会
6月10日（金）	部会	観光・流通・サービス部会 新任者・新入会企業　歓迎懇親会	18：30－20：30 IPPIN CAFÉ BAR
6月14日（火）	理事会	6月度運営担当理事会 第551回理事会	11：30－12：14 12：15－14：00 日本人会
6月28日（火）	部会	第2工業部会 新任者・新入会企業　歓迎懇親会	18：30－20：30 Pu Dong Kitchen
6月30日（木）	委員会	6月度会員講演会 「北朝鮮情勢やISの状況アップデート」	15：00－17：00 日本人会

月報 June, 2016

編集後記

左：武末　右：松井

この８月から娘がインター校のミドルスクールに上がることもあり、説明会に参加してみました。日本でも小学校から中学校へは科目毎の先生が増えるとか、クラス担任の在り様とか、いろいろと変わるものなのでしょうが、聞けばこの学校のスケジュールは、まるで大学の時間割のよう。その中に「フレックス」なる時間帯があって、メンター（一種の担任）に自分の状況を相談したり、科目の先生に時間をとってもらい、補習や追加カリキュラムを組んでもらったり、はたまた宿題を早々に済ませるべくその時間を充てたりと、「自由に」使える時間が毎日あるとのこと。もちろん、その時間帯の活用度合いには個人差があるとのことですが、授業・宿題・個人的関心、一方で勉強含めた悩みの相談・解消に、自分で自分の時間をマネジメントしていくことになるのかと、新鮮な驚きでした。

ミドルスクールの校長がはなった一言も印象的でした。「子供たちはキャンパスの中ではいくらでも失敗していいんです。間違ったらなぜそうなったか、次はどうすべきかを周りの大人たちに手伝ってもらって考え直し、やり直せばいいんです。」さまざまな文化的バックグラウンドをもった人たちと交わりながら、自分の考えもしっかりもって主張する。自分の状況に合せて自分の時間をどう活かしていくか考えて取り組んでいく。いろいろな失敗も含めて、こうしたことを積み重ねていって欲しいな、と心から思いました。

月報６月号では、高齢化社会への対応としても示唆に富むシンガポールのメイド事情、TPPを初めとする新たな国際関係におけるサプライチェーンマネージメントの今後といったお話に加え、ワインの楽しみ方のヒントや「ジャパンタウン」を構想しつつ日本の食の海外進出支援への取り組みといったバラエティ豊かな特集と、「観光」をテーマに日星の動向を比較した業界プラス１からなる合計５本の記事を掲載させて頂きました。

お忙しい中スケジュールの合間を縫ってご執筆くださった皆様に、この場をお借りして、心からお礼申し上げます。

（編集後記担当　Ernst & Young Solutions LLP　武末 知之）

○名前　武末 知之
○出身　東京都
○在星歴　2013年7月に着任
○会社名　Ernst & Young Solutions LLP（コンサルティング会社）
○仕事内容　主にM&Aに関連するコンサルティングサービスにおける日系企業担当
○趣味　旅行、ランニング、スポーツ観戦
○シンガポールのお気に入り
　気の合う仲間とすぐにBBQできること　寒さ知らずで早朝のランニングが楽しめること

○月報読者の皆様へ
　初の海外駐在経験者ですが、いろいろな状況で改めて「日本の良さと課題」を感じてきました。日本について非常に関心の高いシンガポールでは、世界と対峙する日本あるいは日本的なものについて様々な経験が得られるものと考えております。皆様の身近にある出来事やお考えを、ご意見として是非お寄せ下さい。

○名前　松井 達也
○出身　神奈川県
○在星歴　2015年1月に着任
○会社名　KDDI Singapore Pte Ltd
○仕事内容　東南アジア域内の事業開発、サービス開発、営業企画等
○趣味　スキューバダイビング、マラソン、旅行
○シンガポールのお気に入り
　Marina Bay からGardens by the Bay の脇を通ってMarina Barrageのループをぐるっとまわって戻ってくるランニングコース。夜は特に景色が素敵です。(但し５月末現在一部工事中)

○月報読者の皆様へ
　月報を担当しておりますと、専門外の話題に触れることが多々あります。自らの知識範囲の狭さを痛感すると共に日々勉強になります。皆様においても月報から新しい驚きや発見を感じて頂けるよう紙面づくりに努めてまいります。

発行

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY, SINGAPORE
10 Shenton Way #12- 04/05 MAS Building Singapore 079117
Tel: 6221 - 0541　Fax: 6225 - 6197
E- mail: info@jcci.org.sg　Web: http://www.jcci.org.sg

編集

TOUBI SINGAPORE PTE. LTD.
53 Amoy Street Singapore 069879
Tel: 6438 - 3937　Fax: 6222 - 0010
Web: http://www.toubi.co.jp/

印刷

adred creation print pte ltd
Blk 12 Lorong Bakar Batu #01-01 Singapore 348745
Tel: 6747 - 5369　Fax: 6747 - 5269
Web: http://www.adredcreation.com/

☆★JCCI Eメール送信サービスのお知らせ★☆

シンガポール日本商工会議所ではセミナー情報や、サービス・新製品等のビジネス情報を

弊所メーリングリストを使用し、会員企業の皆様にお届けするサービスをご提供しております。

（2016 年 3 月時点、2599 名の方にご登録して頂いております）

Eメール送信サービス１回

SGD 200（GST 込み）

（※会員企業様のみ利用可能とさせていただいております）

ご利用をご希望の方は「 info@jcci.org.sg」（担当：Ms. Doris）まで、

下記必要事項を明記の上、お申し込み下さい。

①希望送信内容　※原稿はソフトコピー（500KB 以下、PDF）にてご提出下さい。

②希望送信日　※余裕をもって、お申込み下さい。（土日・祝日を除く）

③支払方法　※現金・小切手・GIRO のいずれか

【　お申込みから配信までの手順　】

お申込み頂いた後、事務局よりお申込確認用紙・ご請求書を送付致します。

お支払をお済ませいただき、テストメールをご確認頂きました後、配信となります。

皆様からのお申込みをお待ちしております。

シンガポール日本商工会議所事務局　担当：Doris（Ms）
10 Shenton Way, #12-04/05 MAS Building, Singapore 079117
TEL: 6221-0541　FAX: 6225-6197　E-mail: info@jcci.org.sg

JCCI SINGAPORE

会員データーベース　訂正・変更記入フォーム

会員データーベース登録内容に訂正・変更がございましたら、下欄にご記入の上、事務所まで FAX または E メールにてご連絡頂きますよう、御願い申し上げます。

注：＊必ず会社名と E メールはご記入下さい。

会社名(日)			
会社名(英)＊			
旧代表者名(日)			
新代表者名(日)		新代表者名(英)	
E-MAIL＊			

役職(英)		役職	
Address			
TEL:		業務内容	
FAX:			
WEB:			
日本人社員数		総従業員数	
変更日	年　　月　　日　より		

緊急連絡 E メール：

その他

Fax: 6225 6197

担当：ドリス(doris@jcci.org.sg)

JCCI
SINGAPORE